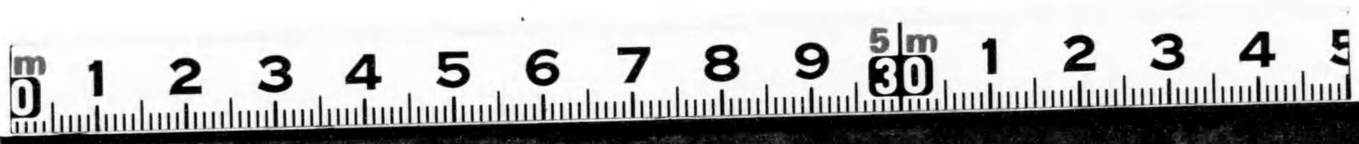
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

315
285

出口

特210
880

親鸞聖人と正信偈

旭竟恩講述

昭和四九年・小西・印

緒言

一、『正信念佛偈』は、わが親鸞聖人の信仰の結晶であります、この短偈の中に釋尊一代の經典の極致、三國七祖の人格と妙義を攝め、もつて聖人自らの信念を最も明瞭に告白したまへる生命の聖典であります。

一、私が幼少にして、かたこと交りに物言ひ初めし頃、母の膝の上にて、如來樣に合掌し念佛する時に一緒に教へられし最初の佛典であつて、また一日に二度は誦まぬ日のない畢生の大教であります。

一、本書の内容は私を中心とせる、高松市佛教眞聲會、姫路市長濱氏方染香會播州慶德寺斯光會、西宮市八馬兼介氏の家庭等、に於て連續講話せしものを纒めたものであります。

一、本偈を味ふるにあたつては、つねに先輩の講錄や、師友の感話等を參考に

して、わが自督を述べたものであります。

一、何分慌しい生活の餘暇に綴りしもので、また會員配付の性質上、紙數が限定されし結果、前後が整はず、甚だ慊らないのでありますが、これらの不備は幾重にも讀者の寛恕を請ふ次第であります。

一、顧ふに、私が大正十年秋九月、窮屈な教團を去りて、ひたすら求道と傳道の生活に入つてより、まる九箇年、この間、北海に南海に、關東に關西に、山陰に九州に、各地を遍歷して、多くの御同朋と共に、時には泣き時には喜び、時には自分ながらあきれる程、傲慢なる態度で叫んだこともありました、いま本書を公にするに當りて一しほ無慚無愧の氣がします、唯稱名念佛して耻ぢ入るばかりであります。

昭和四年八月　　神戸の寓居にて　　旭竟恩識

親鸞聖人と正信偈

目次

本文……一

第一講　親鸞聖人と正信偈……一三

正信偈拜讀の感——親鸞聖人を偲ぶ——教理行果と教行信證——正信偈の出所——法然聖人の年忌——家庭拜讀の始め——佛前の禮拜——故横田千之助氏と本偈——乞食と連枝——正信念佛偈の題號——お念佛より近づかれて

第二講　阿彌陀佛とはどんなお方か……二八

歸命無量壽如來、南無不可思議光——願望に報い給ふ佛——佛體、信心、稱名——心中にて出會へ——獨堪師と念佛上人——病院の法話——死ぬのは厭だ

——俱會一所——讃佛歌をうたふ——死なぬ佛に誰がなる

第三講　如何にして救はるべきか……三八

歸命と南無——本願招喚の勅命——勅命を聞くことは——心の耳を開くのだ——

己れをみつめよ——南濱のおかる婆——直感の聲——不可思議光如來

第四講　如來は如何にして顯はれ給ひしか……四四

如來の顯はれ給ひし原因——因緣果の法則——如來とは——法藏菩薩——世自

在王佛——阿彌陀佛の前身——諸佛淨土の因、國土人天の善惡

第五講　南無阿彌陀佛のすがたとなつて……五一

建立無上殊勝願、超發希有大弘誓——五劫思惟之攝受——四十八願——兆載永

劫の修行——十七願——重誓名聲聞十方——十劫成佛——親鸞一人のためなり

——石の枕の法悅——法然聖人の法悅——自己一人の問題——本願は我胸にモ

グ〳〵——斷りはもうおそい

第六講　みひかりの如來……六三

一寸先はやみ——聖人の本尊は光明の佛——大經所說の十二光佛——普放——

無量光——無邊光——無礙光——無對光——光炎王——清淨光——歡喜光——

智慧光——不斷光——難思光——無稱光——超日月光——照塵刹——一切群生

蒙光照

第七講　光明の靈感……七一

光明の體——色光と心光——光明に觸れることは——藝者より妾へ——念佛を

申して良心に責めらる——長唄の師匠——光明の靈感——紫雲玄溟和上——蓮

元慈廣師の道歌——照育と遍照——われらの知らない間から

第八講　名號の感得……八四

本願——救濟の二方法——K君と子供——親心は子心の上にみる——友の懺悔

——矛盾の大悲——諸佛に言ひ譯が出來ぬ

第九講　南無阿彌陀佛……九五
本願の名號——正定業——名號の體——名號の相——名號の用——涅槃——至心信樂願爲因——信は願より——たのみ所、まかせ所——佛像の禮拜——佛心を拜む——ほこけいぢり——香樹院師と禮拜——北國の信者

第十講　現當二世の利益……一一〇
成等覺證大涅槃——必至滅度願成就——彌勒菩薩——必至滅度と必墮無間——一足ふみはづしたら

第十一講　釋尊出世の本意……一一七
如來所以興出世——釋尊の出世——出家——苦行——成道——覺りの內容——釋尊の御容貌——佛教美術の中心——釋尊出世の本意——唯說彌陀本願海——正覺の道程——法華經と大經

第十二講　惡人正機の本願……一三八
現代世相——Mの病氣——五濁惡時群生海——應信如來如實言——地獄が怖ろしい——名號が薰じついて

第十三講　一念喜愛心と不斷煩惱……一四二
子供と犬——能發一念喜愛心——一念——能發——鶯が鳴く——喜愛心——ほれかへす一念——ライオンと獅王——不斷煩惱得涅槃——涅槃

第十四講　歸入一味の宗教……一五三
凡聖逆謗齊廻入——鴦崛摩の百人斬——懺悔は尊い——天親の懺悔——耳四郎と辨圓——廻入——聖人の懺悔生活——聖人の自重的態度

第十五講　自他平等の救ひ……一六五
如衆水入海一味——自他平等の救ひ——信心諍論——一味——小作爭議の解決——南無阿彌陀佛の本尊——香川縣の川田政吉氏

第十六講　如來の照護……一七四
攝取心光常照護——遍照と攝取——涙の軍隊教育——常照護——中學生のしつけ——智慧と慈悲

第十七講　日光と雲霧……一八三
已能雖破無明闇——貪愛瞋憎之雲霧——常覆眞實信心天——根のない草木——譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇——これでは〳〵、それでも〳〵

第十八講　信心を獲る方法と其はたらき……一八八
信心——信心の體——獲信の方法——信心の相——護信見敬大慶喜——無上の喜び

第十九講　横超の直道……一九七
卽横超截五惡趣——竪の修行——横超の直道——華嚴の鳳潭師——算盤のけたはづれ

第二十講　われらの光榮……二〇三
一切善惡凡夫人——聞信如來弘誓願——佛言廣大勝解者——胸のうちはかはらないか——智慧とは智識ではない——山口のお菊——香川縣の片山つい氏——穴吹長次氏——是人名分陀利華——藝術上の作品——倫敦の一少女

第二十一講　信順の至難と憍慢の誡め……二一五
彌陀佛の本願念佛——邪見——惡人正機のはきちがひ——憍慢——惡衆生——信樂受持甚以難——難中之難無過斯——聖人の謙遜の態度——香樹院と高慢婆——不良少年を預る——知る分齊——好む分齊——樂む分齊——芭蕉翁の俳句生活

第二十二講　三國の七祖と其指導……二三一
七高僧——七祖選定の理由——印度西天之論家——中夏日域之高僧——顯大聖興世正意——明如來本誓應機——相承——法霖師と法主——胸から胸へ

第二十三講　第一祖龍樹大士の人格と信念……二四三

釋尊の豫言――釋迦如來楞伽山――爲衆告命南天竺――龍樹大士出於世――悉能摧破有無見――有の見――無の見――宣說大乘無上法――證歡喜地生安樂――龍樹の少年時代――隱身術を學ぶ――友の横死と性慾苦が緣となつて出家す――龍宮に入る

第二十四講　難易二道と現生不退……二五二

顯示難行陸路苦――難行道――易行道――人間は人間である――俎上の鰻――憶念彌陀佛本願――夢中で我子の名を呼ぶ――憶念――自然卽時入必定――唯能常稱如來號――應報大悲弘誓恩――念佛すれば何故報謝になるか――佛が滿足し給ふ――不良青年の子を持つ親――罪の棒引――利地の德を顯す――兵庫の人の病床法話

第二十五講　第二祖天親菩薩と無碍光如來……二六九

天親菩薩――小乘の奧義を極む――無着菩薩――舌を切らんとす――信仰の確定――天親菩薩造論說――歸命無碍光如來――依修多羅顯眞實――光闡橫超大誓願――三厳二十九種莊厳――土田平兵衞

第二十六講　本願力廻向の一心……二七九

廣由本願力廻向――本願力廻向の一心――合三爲一――香樹院師の說教――ゝらまへられて――願作佛心――度衆生心――五念――歸入功德大實海――必獲入大會衆數――得至蓮華藏世界――卽證眞如法性身――遊煩惱林現神通――入生死薗示應化――六神通――利他と愛他の生活

第二十七講　第三祖曇鸞大師と其信心……二九〇

淨土教支那に傳はる――曇鸞大師生る――仙經――菩提流支三藏――長生不死の法――大師の入信――本師曇鸞梁天子――常向鸞處菩薩禮――三藏流支授淨教――焚燒仙經歸樂邦――往生論註――天親菩薩論註解――報土因果顯誓願――信念の發表――西方の淨土を信ず

第二十八講　自力他力と往還二廻向……二九九
往還廻向由他力——他力——乞食的他力——無力的他力——宗教の嫌ひな譯
——不動尊凝り——惡魔降伏——かち〳〵山の狸舟——五念門と五功德門——
一拳五指——一心五念——大師の功績——正定之因唯信心——惑染凡夫信心發
——證知生死卽涅槃——諸有衆生皆普化

第二十九講　第四祖道綽禪師と聖淨二門……三一三
道綽禪師——曇鸞大師の石碑をみて入信す——禪師の傳道——道綽決聖道難證
——唯明淨土可通入——二理由——大集經——前二祖との異風——尼僧の訪問
——百日の化行

第三十講　萬善の自力を貶しめて念佛を勸む……三三三
聖道の行、淨土の行——六度の行——道乘法師——瞋恚の火焰——萬善自力貶
勤修——圓滿德號勸專稱——三不三信誨懇懃——三不と三信——像末法滅同悲
引——正法と像法——末法と法藏——彌陀中心の宗教——一生造惡値弘誓——
至安養界證妙果

第三十一講　第五祖善導大師の功績……三三七
善導大師——觀法——道綽禪師に依て入信す——五會の式——大師の平生——
大師の教化、自殺者を出す——京寶藏——半金色——觀經の誤解——每夜化僧
來たる——四帖疏——一字一句不可加減——善導獨明佛正意——矜哀定散與逆
惡——善導獨り——定善と散善——逆惡——矜哀——往生——光明寺

第三十二講　獲信の因緣と凡夫正機……三四六
獲信の方法——光明と名號——子宮の卵巢と精蟲との如き——光明名號顯因緣
——開入本願大智海——信心のものがら——金剛石——慶喜の一念——行者正
受金剛心——慶喜一念相應後——韋提——仙人を殺す——秘密の罪——王子を

高樓から落す――阿闍世太子――觀經の說法――三忍――除苦惱法と名號法
――卽證法性之常樂――二種深信――一心正念の聲――就人立信、就行立信
――本願招喚の勅命――カムヒア

第三十三講　第六祖源信和尙と厭離欣求……三六〇

我邦他力信仰の先驅者――源信の幼時――源信の母の訓育――出家――恩賜の布帛――和尙の發奮――橫川に入る――和尙の入信――信念の告白――和尙故郷に歸る――母の病床に侍る孝子源信――往生要集――源信廣開一代經――偏歸安養勸一切――源信如來の敎化

第三十四講　報化二土と心光常護……三七一

源信和尙の來迎寺に詣る――地獄極樂の繪――死出の相――永久の地獄の道へ――殺人强盜に襲はる――業火もゆる我胸――專修と雜修――五正行――正行と助業――專雜執心判淺深――報土と化土――報化二土正辨立――極重惡人唯稱佛――自己一人への御敎化――我亦在彼攝取中――煩惱障眼雖不見――大悲無倦常照我――人間の腹から猫は出ぬ

第三十五講　第七祖源空聖人と眞宗の敎……三八三

父の遺言に依て出家す――叡山に上る――黑谷に入る――一切經を五邊讀破――入信――吉水の草庵――聖人の敎化――本師源空明佛敎――憐愍善惡凡夫人――選擇集――眞宗敎證興片州――選擇本願弘惡世――聖道僧のねたみ――流罪――一枚起請文――生命がけの念佛

第三十六講　疑を誡め信心を勸む……三九一

疑ひ心――信じたい心――疑ひは隔て心から起る――朝寢の子――知らぬ間の御恩――愛鳥家の山田君――今一聲いま一こえ――如來の實在――信不退と行不退――口稱念佛と信心――速入寂靜無爲樂――必以信心爲能入

第三十七講　結　勸……三九九

經文の竪糸――織り込む横糸――弘經大士宗師等――拯濟無邊極濁惡――親鸞聖人――道俗時衆共同心――唯可信斯高僧說――結論　一四

目次終

正信念佛偈

親鸞聖人御製

歸命無量壽如來　南無不可思議光
法藏菩薩因位時　在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因　國土人天之善惡
建立無上殊勝願　超發希有大弘誓

無量壽如來に歸命し、
不可思議光に南無したてまつる。
法藏菩薩因位のとき、
世自在王佛の所に在して、
諸佛淨土の因、
國土人天の善惡を覩見して、
無上殊勝の願を建立し、
希有の大弘誓を超發せり。

五劫思惟之攝受
重誓名聲聞十方
普放無量無邊光
無礙無對光炎王
清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照
本願名號正定業
至心信樂願爲因
成等覺證大涅槃

五劫に之を思惟して攝受す、
重ねて誓ふらくは名聲十方に聞えんと。
普く無量無邊光、
無礙、無對、光炎王、
清淨、歡喜、智慧光、
不斷、難思、無稱光、
超日月光を放つて塵刹を照す。
一切の群生光照を蒙る。
本願の名號は正定の業なり。
至心信樂の願を因となす。
等覺をなり大涅槃を證すことは、

必至滅度願成就
如來所以興出世
唯說彌陀本願海
五濁惡時群生海
應信如來如實言
能發一念喜愛心
不斷煩惱得涅槃
凡聖逆謗齊廻入
如衆水入海一味
攝取心光常照護
已能雖破無明闇

必至滅度の願成就し給へばなり。
如來世に興出したまふ所以は、
唯彌陀の本願海を說かんとなり。
五濁惡時の群生海、
應に如來如實の言を信ずべし。
よく一念喜愛の心を發すれば、
煩惱を斷ぜずして涅槃を得。
凡聖逆謗ひとしく廻入すれば、
衆水の海に入つて一味なるが如し。
攝取の心光常に照護したまふ、
已に能く無明の闇の破すと雖も、

貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇
獲信見敬大慶喜
卽横超截五悪趣
一切善悪凡夫人
聞信如來弘誓願
佛言廣大勝解者
是人名分陀利華
彌陀佛本願念佛

貪愛瞋憎の雲霧、
常に眞實信心の天を覆へり。
譬へば日光の雲霧に覆はるれども、
雲霧の下明かにして闇なきが如し。
信を獲て見て敬ひ大に慶喜すれば、
卽ち横に五悪趣を超截す。
一切善悪の凡夫人、
如來の弘誓願を聞信すれば、
佛は廣大勝解の者と言へり、
是人を分陀利華となづく。
彌陀佛の本願念佛は、

邪見憍慢惡衆生
信樂受持甚以難
難中之難無過斯
印度西天之論家
中夏日域之高僧
顯大聖興世正意
明如來本誓應機
釋迦如來楞伽仙
爲衆告命南天竺
龍樹大士出於世
悉能摧破有無見

邪見憍慢の惡衆生、
信樂を受持すること甚だ以て難し、
難の中の難斯に過ぎたるはなし。
印度西天の論家、
中夏日域の高僧、
大聖興世の正意をあらはし、
如來の本誓機に應ずることを明せり。
釋迦如來楞伽山にして、
衆のために告命したまはく、
南天竺に龍樹大士世に出て。
悉くよく有無の見を摧破せん、

宣説大乘無上法
證歡喜地生安樂
顯示難行陸路苦
信樂易行水道樂
憶念彌陀佛本願
自然卽時入必定
唯能常稱如來號
應報大悲弘誓恩
天親菩薩造論説
歸命無礙光如來
依修多羅顯眞實

大乘無上の法を宣説し、
歡喜地を證して安樂に生ぜんと。
難行の陸路苦きことを顯示して、
易行の水道樂きことを信樂せしむ。
彌陀佛の本願を憶念すれば、
自然に卽のとき必定にいる、
唯よく常に如來のみ號を稱して、
應に大悲弘誓の恩を報ず可しと言へり。
天親菩薩論を造りてとかく、
無礙光如來に歸命したてまつる、
修多羅に依りて眞實を顯し、

光闡横超大誓願
廣由本願力廻向
爲度群生彰一心
歸入功德大寶海
必獲入大會衆數
得至蓮華藏世界
卽證眞如法性身
遊煩惱林現神通
入生死薗示應化
本師曇鸞梁天子
常向鸞處菩薩禮

横超の大誓願を光闡し、
廣く本願力の廻向によりて、
群生を度せんが爲に一心を彰す。
功德の大寶海に歸入すれば、
必ず大會衆の數に入ることを獲、
蓮華藏世界に至ることをうれば、
卽ち眞如法性の身を證せしむ。
煩惱の林に遊んで神通を現じ、
生死の薗に入て應化を示すと言へり。
本師曇鸞は梁の天子、
常に鸞の處に向つて菩薩と禮し奉る。

三藏流支授淨教
梵燒仙經歸樂邦
天親菩薩論註解
報土因果誓願を
往還廻向由他力
正定之因唯信心
惑染凡夫信心發
證知生死卽涅槃
必至無量光明土
諸有衆生皆普化
道綽決聖道難證

三藏の流支淨教を授けしかば、
仙經を梵燒して樂邦に歸し給ひき。
天親菩薩の論を註解して、
報土の因果誓願をあらはす、
往還の廻向は他力による、
正定の因は唯信心なり。
惑染の凡夫信心發すれば、
生死卽ち涅槃なりと證知せしむ。
必ず無量光明土に至りて、
諸有の衆生皆普く化すといへり。
道綽聖道の證し難きを決し、

唯明淨土可通入
萬善自力貶勤修
圓滿德號勸專稱
三不三信誨慇懃
像末法滅同悲引
一生造惡値弘誓
至安養界證妙果
善導獨明佛正意
矜哀定散與逆惡
光明名號顯因緣
開入本願大智海

唯淨土に通入すべきことを明す。
萬善の自力は勤修を貶しめ、
圓滿の德號は專稱をすゝむ。
三不三信の誨慇懃にして、
像末法滅同じく悲引す。
一生惡を造ども弘誓に値ぬれば、
安養界に至りて妙果を證せしむと言へり。
善導ひとり佛の正意を明かにし、
定散と逆惡とを矜哀して、
光明名號の因緣をあらはす。
本願の大智海に開入すれば、

行者正受金剛心
慶喜一念相應後
與韋提等獲三忍
卽證法性之常樂
源信廣開一代教
偏歸安養勸一切
專雜執心判淺深
報化二土正辨立
極重惡人唯稱佛
我亦在彼攝取中
煩惱障眼雖不見

行者正しく金剛心の受しむ。
慶喜の一念相應して後、
韋提とひとしく三忍を獲、
卽ち法性の常樂を證せしむと言へり。
源信廣く一代の教を開きて、
偏に安養に歸して一切を勸む。
專雜の執心淺深を判じて、
報化二土まさしく辨立せり。
極重の惡人は唯佛を稱すべし。
我亦彼の攝取のなかにあり、
煩惱に眼障られて見奉らずと雖も、

大悲無倦常照我
本師源空明佛教
憐愍善惡凡夫人
眞宗教證興片州
選擇本願弘惡世
還來生死輪轉家
決以疑情爲所止
速入寂定無爲樂
必以信心爲能入
弘經大士宗師等
拯濟無邊極濁惡

大悲倦無して常に我を照給と言へり。
本師源空は佛教に明かにして、
善惡の凡夫人を憐愍し、
眞宗の教證を片州に興し、
選擇本願を惡世にひろむ。
生死輪轉の家に還來することは、
決するに疑情を以て所止となす。
速に寂定無爲の樂に入ることは、
必ず信心を以て能入と爲と言へり。
弘經の大士・宗師等、
無邊の極濁惡を拯濟したまふ。

道俗時衆共同心
唯可信斯高僧說

道俗時衆共に同心にして、
唯斯高僧の說を信ずべし。

親鸞聖人と正信偈

旭　竟　恩　述

第一講　親鸞聖人と正信偈

正信偈拜讀の感

一、あはたゞしい私の生活のうちで、いちばん心の落着ける時は、なんといつても、朝と晩、靜かに佛前に跪づいて、なつかしいみ佛の御顏を仰ぎ、合掌禮拜しながら、家族と共に、聲をそろへて、正信偈御和讃を誦げる時ほど、心の底の和らぐ時はない、この間は、全く如來の淸きみ心と、私の汚れたたましひとが、ピッタリと一つになつてをるやうな心地がして、何處からともなく、親鸞聖人のみ聲が聞こえてくるやうな氣がして、覺えず身が引締つて參ります。

二、次から次へと讀んでゆくうちには、阿彌陀如來も釋迦如來も、龍樹大士も天親菩薩も、道綽禪師も、善導大師も、源信和尚も、源空聖人ものあらゆる諸聖と相まみへて、これらのお方々から、直接有難い御說法を聽聞してをるやうな心持になつて、何ともいへぬ崇高な感に打たれて思はず涙にむせぶことさへある。

三、そうして、この正信偈を誦む時は、私はいつも聖人が、北國の雪空や、常陸の稻田邊りを巡禮して歩かれたお旅姿を思ひ出す、幼なくして兩親に別れ、中年にしては力と賴む師に別れ、なつかしい妻に別れ子に別れ、凡てのものに突き離されて、しかも罪人親鸞として、晝の間は獵する者や百姓の人を相手に道を語り、夜は嵐や雪の中で、獨りつくねんと如來の御前にひれふして合掌せられたその時など、果してどんなお心持をせられたであらうか、また、常陸時代には、色〻の家庭の惱みや、貧乏の苦しみに煩はされ乍らも、暇さへあれば板敷山などの嶮岨を越へて信心を傳へ、歸れば靜かに念佛せられたその痛ましいお姿が、この正信偈を通して、幻ろにわが心のうちに拜まれてくる。

四、私が時々、苦しい事のある時、悲しい事のある時、心の中が行詰つてしまふ時は、いつもこの正信偈を口の中で稱へてをると、いつの時でも聖人が私の心の中に現はれて「オヽわれも、それには苦しんだのだ、汝もまた、それを惱んでをるか、貪愛瞋憎之雲霧、常覆眞實信心天、譬如日光覆雲霧、雲霧之下明無闇、泣くな、悲しむな、そこに信心が働いて下さるのだ、その苦しい悲しい心の底に如來が下じきになつて居て下さるのではないか」といふ風に、いつもこの正信偈を以て、苦しむ私を慰め、沈む私を力づけて下さるのである。

五、聖人は殆ど人間として負ふべき凡ての苦しみの重荷を負ひ乍ら、而も、旅から旅へのさすらひの中に、あの大部の『教行信證文類』の六冊の大著述をなされたのである、其の雄々しき精力と、強い〳〵信念には、實に驚かずにはゐられない。

六、大體、聖人以前の佛教者達が道を求むる順序としては、必ず「教、理、行、果」の四法の法則を履まねばならぬものと定めてをつた樣である、即ち教主釋尊の「教」に基き、その教の道理を「理」解した上に、その教へ通りを自ら修「行」せねば、佛の證「果」は開かれないものと、きめこんでをつたものである。

七、然るを、わが親鸞聖人に到つて、大膽にも從來の無生命の、形式的佛教の型を、根本から打ち碎き、あく迄も阿彌陀佛の本願を信じ切り、堂々と「教、行、信、證」の、新しき道を開いてゆかれたのである。

「教」とは元より、釋迦如來の說かれたる眞實の教たる大無量壽經を指すのである、それを眞實の教といふは、何れの修行も及ばない智惠もなければ善根もない、凡てに行き詰つたわれら惡人を、一人も漏らさず救ふといふ阿彌陀如來の教をいふのであります、この阿彌陀佛の教とは、即ち、所有ものを悉く救はねばおかぬの本願から、法藏比丘と顯はれて「諸苦毒中、我行精進、忍終不悔」と、佛自

らわれらの爲に修行して、それを完全に成就して、阿彌陀佛自身のすがたを、南無阿彌陀佛の名號のうへに顯はして、直接われらに向つて下さるみ教である、而して、この阿彌陀佛の本願に依て出來上つた南無阿彌陀佛の名號、即ち本願の名號を、聖人は「行」といはれたのであります。

この南無阿彌陀佛の行こそ、われらを救ふために御成就なされた眞實の大行であるから、われらはこの南無阿彌陀佛の大行の謂れを、わが心に聞き開くことによつて、この南無阿彌陀佛を一致して、そこに救ひが味はれるのである、此ところを「信」といふのである、言ひ換ふれば、十劫の昔、南無阿彌陀佛の出來上つた其時より、如來のわれらを救はねばおかぬ助けねばおかぬの、大御心は（光明ともいふ）絕ず吾等の心の底に來りて、働きづめであるから、私達は之を素直に承けいれるところに、南無阿彌陀佛はわれらの心に生れ給ふのである、これを「信心」といふ、だから信心の本質は、云ふ迄もなく南無阿彌陀佛のことである、聖

人はこれを他力廻向の「大信心」と仰せられました。

而してかく信ずる立所に、われらは南無阿彌陀佛と一體となるのであるから、早や佛の證りの仲間入りをすることになるからこれを「證」といふ、この謂れを釋尊は大無量壽經には「卽得往生、住不退轉」と說かれたのである、依つて未來は必ず、佛の證果を開くのであると、聖人は發表せられたのであります。

八、この思ひ切た宣言に對して、從來の窮屈な形式に囚はれてたゞ盲目的に、自力の修行をしなければ、佛敎ではないかのやうに考へてをつた所謂聖道門の人達は云ふ迄もなく、同じ淨土門の中の自力の臭みの離れぬ連中迄も雷同して、わが聖人を敎界の異端者の如く、また、師の法然の敎へに背く異安心者の如く攻擊したのであります、何れの時代でも、眞實の生命に立上つて、眞實をありのまゝに叫ぶものは、どんな人でも、種々の迫害を受けるものである、わが聖人は、かかる無自覺な、生命の拔けた、木乃伊同樣の僧侶達には、すこしも逆ふことなく、

たゞ信ずるまゝに、純眞に、着實に、勇猛にこの他力の大道を生々と進んで往かれたのである、そこに聖人の宗敎はます〳〵强い光となつて輝いたのであります。

正信偈の出所

九、而してこの聖人心血の著書たる『敎行信證文類』六卷の聖典は、今より凡そ七百年前、後堀河天皇の元仁元年、聖人五十二歲の頃、常陸の國稻田の草庵に於て出來上つたのである、而して此大著六卷の肝要は、第二卷目の「行卷」と、第三卷目の「信卷」とであるが、その中でも要中の要とも云べき「行卷」の終りの所、卽ち次の「信卷」に移る間の所に、此「正信念佛偈」六十行、百二十句の御文が認められてあるのであります、つまり敎行信證六卷の上に顯はされたる聖人の一大信念を、この短い正信偈の中に最も明白に、其肝要を縮められたものであるといつても差支へはないのである、故に私達がよくこの正信偈を味讀することに依て、聖人一代の大精神たる敎行信證文類六卷全部を拜讀したのと同樣の價値がある程、此正信偈の上に聖人の信念の全部が顯はされてあるのであります。

法然聖人の年忌

一〇、而もこの聖典を書き上げられた元仁元年は、恰も師の法然上人の十三回忌に當つてゐらるゝのである、早くから兩親に別れて、温かい父母の情を充分に味はれなかつた聖人には、肉親の親以上にお慕ひなされた師の御年忌に際して、その御靈前に跪づいて、心から如來大悲の御惠みを喜び、師の御恩の尊さに、熱き涙を拭ひつゝ、此正信偈をお讀みなされた事であらうと思へば、本當に涙ぐましい感にうたれます。

家庭拜讀の始め

一一、而して、此大切な正信偈を、我々の家庭に於て、朝と夕、佛前で讀誦するやうに敎へて下されたのは、親鸞聖人御入滅二百年の後、本願寺の八代目の蓮如上人の五十九歳の頃、卽ち文明五年三月に、始て一般の者にこの正信偈と三帖和讃を拜讀するやうにお示し下されたのであります、幸にして、聖人の敎への流れを汲む私達は、まだこの世に生れて來ない母の腹の中にゐる間から、この正信偈はよく聽聞してをつたのである、これをわが口に誦げ初めたのもまだ物心のわからぬ舌も充分廻らない頃からである、勿體なくもそれが母が添寢のふとんの中や、祖母の暖かい背中の上で、次から次へと敎へられたものだと想へば、私はたまらないほど親しみを感じます、私達は本當に、生れない先きから此正信偈に育てられて來たものである、實にこの偈文こそわれらの生活から一日も切り離すことの出來ない大切な生命の聖典である。

佛前の禮拜

一二、世には御佛前の勤行を、單なる形式であり虛禮であり故なき迷信であると心得てをる偏見者がありますが、これらは眞の勤行の味ひを知らず、禮拜の意義を辨へぬ淺見な人達である、信仰のある者は、朝夕の勤行によつて、いよ〳〵法義の味ひを喜ぶのであります、家々の佛檀は、心の鏡、心の垢を洗ふ法の浴湯である、明け初める窓の內、暮れかゝる室の內、明々と御燈明をあげ、生々としたお花を供へ、香煙ゆらぐ所に、親子兄弟夫婦打揃ふて、この正信偈を讀んで如來大悲の尊さを思ふ、世にこれ程の意味深い行ひがどこにあらうか。

一三、故横田千之助氏といふは、政友會の智囊として、また嚴正忠直の人として、誰知らぬものもなき、護憲三派鼎立のアノ複雜なる内閣時代に當つて、司法大臣の要路に立ち各派の間のくさびとなつて能く大政の調理に効を奏した人であつた、若しこの人に長壽を許したならば、國運の進展上大に見るべきものがあつたであらうに、少壯時代より苦學を累ね、精勵恪勤のために健康を傷ひ、不幸中年に夭死せられたことは、天下萬衆の痛惜した事はまだ國民の記憶に新なる所である、この人は如何なる多忙の日でも、一日として朝暮の禮拜勤行を怠つた事はなかつたと聞く、或る人が横田氏に問ふた、「閣下は大臣といへるこの劇職にありながら、朝夕の佛前勤行を怠られたことがないと申すが事實でありますか、また如何なるお心持で、如何なるお經を讀まれますか」と、氏は之に答へて、「俺は祖母に育てられて成人したのであるが、その大恩ある祖母は厚い他力の念佛の信者であつた、俺の幼き時、膝の上から念佛を稱へさせ、正信偈和讃を敎へてくれた、

そうして必ず朝暮は佛前に伴れ行いて、偕に共に禮拜もさせ、口を揃へて讀誦をもさせたものである、またときどきには念佛の意義をも話して聞かせた、それが自然と心に浸みこんだといはうか、多年の習慣となつたといはうか、殆んど日課と同樣に勤めなければ氣がすまぬ樣な氣持がするのである」と語り終つて猶つけ加へて云はれるやう、「俺は朝の禮拜の時は佛前に於て誓ひを立てる、今日一日はどうか邪念を起さぬ樣惡しき行ひをせぬやう、佛のしろしめすやうに心を持たせていたゞきたいと念願するのである、……また一日の業務を終つた夕暮には、再び手を洗ひ口を嗽いで佛前に拜禮をする、偉大なる御加護の下に今日の業務を終りましたと衷心の感謝を捧げる、また時としては懺悔もする……これが俺の一日中の尤も大切なる仕事の一つである」と。

瞬時の暇もなき國務大臣の身としてこの勤行を怠らなかつたといふ横田氏の生涯は、四六時中御親の懷を離れぬ生涯であつた、寔に信仰的政治家であつた、

乞食と連枝

されば こそ現代の黨人に類ひなき正しき性行を以て終始せられたのである、劇しき業務に從事する人、社會萬般の事にたづさはる人ほど、この信念がなくてはならぬ、殊に現代に於て然りとする、深く味ふべき話ではないか。（信仰閑話、法悦雜纂所載）

一四、明治四十三年の冬とか、聖人の六百五十回忌の御遠忌のお待受として、大谷派の某連枝が、美濃と飛驒の國境の、人里離れた山中を俥を連ねて過ぎやうとし、一つの谷間の橋の上にかゝられた時、何處からともなく「正信偈」の聲が連枝の耳に聞えて來た、連枝は俥を停めて、その正信偈の聲のする處をたづねられた所、その聲は思ひもよらぬ橋の下からであつた、よくみれば親子三人の乞食が橋の杭に、親鸞聖人の御影像を掲げ、何れも其前に坐つて「正信偈」を讀み誦げてゐたのである、此有樣をみて、連枝初め隨行の方も、こゝろから頭を下げずに居られなかつたそうである、そのお勤めが濟んだ後にその乞食が申すには「御開山聖人には、私等如き賤しき者の志をもお受け下さるのでありませうか」と恐る〳〵尋ねたので、連枝は懇ろに「長者の萬燈より貧者の一燈と申す如く、宗祖聖人も、其方如き者の志こそ、他のそれよりも一層御嘉納遊ばすであらう」と申さるゝと、乞食は懷中より、一包みの志をとり出して「夫では、どうか之を御開山の御影前に差上げて下さいませ」と捧げ奉つたので、連枝は大に其厚き志を悅ばれ、押頂いて受納せられたそうである、此乞食こそ幸福者である、親鸞聖人のつねの御持言に、播州加古の茅屋に妻子と共に乞食生活をして念佛した、教信沙彌を理想的人格と仰がれた、聖人のたましひは富める者や智者や學者の上よりは、却つてこんな低い所に餘計に增すのではなからうか。

正信念佛偈の題號

一五、さて「正信偈」とは委くいふと「正信念佛偈」といふのである、正信とは正しく信ずる信心のことである、念佛とは南無阿彌陀佛を口に稱へる稱名念佛のことをいふ、偈とは偈陀と云つて、佛德を讃嘆する頌のことである、卽ち正信念佛偈とは、聖人自督の信仰を悅ばれて念佛して佛恩を感謝せられた、うたといふ

意味であります、これを聖人自ら行卷に「大聖の眞言に歸し、大祖の解釋を閲して、佛恩の深遠なるをしりて、正信念佛偈を作る」と仰せられてある、依て私達もこの正信偈を讀む毎に、如來大悲の御恩を喜び、釋尊七祖の御跡を辿り、わが聖人の御前に於て、感謝と懺悔を表すものと心得ねばならぬ。

とにかく親鸞聖人の宗教は、たゞこの「正信念佛」よりほかにはないのである、阿彌陀如來の本願の名號、即ち南無阿彌陀佛をわれらの心の主とし、この大生命を力とし、あてとし、たよりとして、われらの總てを、この南無阿彌陀佛に任せて生きるのが「正信」即ち信心の生活である、たとひこの世の行き詰りに遇ふて、右を向いても、左を向いても、唯眞闇がりの無明の大夜のその中に於ても、己が心の中にいつも「我よく汝を護る」といふ力あるみ聲をきゝつゝ、何事にも迷はされず、動かされずに、如來と共に生々と突き進んで行く生活である。

一六、 次に「念佛」とは、其救ひの主の南無阿彌陀佛を口に稱へる事である、

此稱名念佛は、南無阿彌陀佛の如來が、我々人間の上に來つて現に働いてをつて下さるすがたである、同時に念佛は、如來が私を呼び給ふ御聲である「汝一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん」といふ喚び聲それが即ち念佛である、私達は、他人の稱へる南無阿彌陀佛の聲を聞き、自己の稱へる念佛を聞いて、一聲一聲の上に「來れ迎へん」の勅命をきゝつゝ、力强く生されてゆくのである。

一七、 私達は、善智識や同行には、いつも〳〵近づいて居ることは出來ぬ、また、御本尊やお聖教をも、行住坐臥に禮拜し讀むことも出來ぬ、然るに如來はいつでもわれらに附きまとふてゐて下さつて、お念佛を授けて下さる、私達は時處諸緣を論ぜず、お念佛より近づかれて稱名させて頂くのである、私達が念々に稱名することは、念々に佛に對面して居ることである、有難いことであります。

第二講　阿彌陀佛とはどんなお方か

歸命無量壽如來　南無不可思議光

無量壽如來に歸命し、
不可思議光に南無したてまつる。

歸命無量壽如來
南無不可思議光

一、親鸞聖人が歸依し、合掌せられたみ佛は、もとより南無阿彌陀佛の如來樣であります、しかしこの南無阿彌陀佛といふは梵語であつて、この六字を漢語に意譯すると、歸命無量壽如來（無量壽覺）、南無不可思議光如來（無量光覺）、となるのであります、ともに、阿彌陀佛の異名であります。

二、「大無量壽經」によれば、阿彌陀佛が、まだ佛の位におつきなさらない頃、卽ち法藏菩薩の御位にあらせられたときに、其師、世自在王佛のところにましまして、四十八通りの誓願をおたてになつた、そのうちの、第十二願目に、自分が

佛となるときは、量りなき光をもつた身とならねばならぬと誓はれ、また第十三願目には、我佛となるときは、限りなき壽命の持主とならねばならぬと願はれたのであつた、そして、この二願が成就して、報いあらはれ給ひし佛が、わが阿彌陀佛であるから、我が如來を、阿彌陀佛、卽ち無量壽佛、無量光佛と申すのであると、說かれてあります。

願望に報い給ふ佛

三、また「阿彌陀經」のなかには「舍利弗よ、彼の佛の光明無量にして、十方の國をてらすに障礙するところなし、このゆえに號して阿彌陀となす、また舍利弗よ、彼の佛の壽命、および其人民も、無量無邊阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名づけたてまつる」と仰せられてあります。

四、大體、阿彌陀佛とは、たゞわれら一切衆生を、どうかしてたすけてやりたい、なんとかして安慰を得させたいといふ願望が源で佛になられた御方である、併しその、一切衆生を救ふ爲には、先づ御自身が、完全圓滿でなければならぬ、

でないと、他の衆生に對して大利益を與へることは出來ない、ちやうど、人に物を施すには、先づ自分が澤山に物をたくはへておかねば、人に與へることは出來ぬやうなものである、そこで、阿彌陀佛は御自身のうへに、限りなき壽命を體とし、その體より流れ出る量りなき智慧卽ち光明の相を、圓滿に具備せられたのである、そして、その光明をもつて横にひろく十方の衆生を救ひ、壽命をもつてながく三世の衆生を救はんとせらるゝのである、卽ちこの無量壽と不可思議光との二德をもつて、廣く永く、どこ〳〵までもいつまでも、あらゆる衆生を救はんために、この二德圓滿の大悲を、殊更に御身の御名の上に顯はして「無量壽如來」「不可思議光如來」と成られたのである、これ正しく、私達を救ふて下さる大悲の親であります、私達は、この如來に歸命し、このみ佛に南無したてまつり、信じすがつて、現在と未來とに大安慰を得させて頂くのである、わが親鸞聖人が自分をほんとうに救ふて下さるみ親の御名のおいはれを感じ來つて、胸中に湧き上つてくる信念を、抑ふるに抑へきれずして、なんらの前置の語もなく、すぐぶつつけに本偈の最初に、この御名の如來を、お認めなされたことは、誠に自然で尊いことであります。

佛體、信心、稱名

五、そこで、南無阿彌陀佛は、如來の方にあつては元より佛體であるが、われらの心に頂いた時は信心であり、口に稱へる時は稱名となることは前講の如くであるが、從つて、歸命無量壽如來も、南無不可思議光如來も、佛體であり、同時に信心であり、稱名であるといふことが出來るのである、卽ち、歸命無量壽如來も、南無不可思議光も、南無阿彌陀佛も、ともにこれ、われらを、やすく助け救はんとする如來の御念力のあらはれであるから、私達はこの御念力をすなほに頂いて、現在わがたましひの上に明るい光明を認め、限りなき生命を味ひつゝ、お淨土まで力强い旅をつゞけさせて頂くのであります。

六、故に、佛を遠方に眺めて居てはいつまでたつても、お助けは味はれない、

心中に出會へ

近く南無阿彌陀佛のみ親と、我心の中に出合はなければお救ひに預つたとは云へないのである、卽ち私達人間の心の中に、自分を救ふて下さる南無阿彌陀佛の如來が、いつも働いて居て下さることが、ほんとうに味はれ出したことを信心を獲たとも、限りない命を頂いたとも、佛凡一體になつたとも、お助けに預つたともいふのであります。

獨堪師と念佛上人

七、彼の黃蘗の獨堪師が、かつて有名なる念佛上人に問はれたことがある「汝の年、幾何ぞ」と、上人答へて曰く「彌陀と同年」、獨堪又曰く「然らば彌陀の年幾何ぞ」、上人曰く「我と同年」と答へられたといふ事である、實に痛快な問答です、「あなたは、お幾歲でございますか」「阿彌陀樣と同い年でござる」「それでは阿彌陀さまはお幾歲でござるぞ」「私と同じ年でござる」、我れが佛か、佛がわれか、「南無といへば、阿彌陀來にけり一つ身を、われとやいはん佛とやいはん」ちやうど、炭に火がおこりついたやうに、離れんとしても離るべからず、火の全體が炭、炭の全體が火、火と炭とが一致して離されぬやうに、南無阿彌陀佛の佛心と、極惡深重の我が凡心とが一體になり、しかも、火が炭になつたのではなく、炭が火になつた如く、佛心が凡夫の心に徹底して、自分が如來化された所に、まことの信心が味はれるのである、恰も、母に抱かれた幼兒の、身のうち、心の底に、我子可愛いの、親の心がしみこんで、まる〳〵親の心に生かされてゆくやうな有樣が他力信仰といふのである、そこに如來のいのちは我がいのち、我れのいのちは如來のいのち、いつ〳〵までも死ぬことのない無量壽のいのちを、現在こゝで味ふことを得るのであります。

八、ちやうど去年のいまごろであつた、私は二十日間ばかり福岡地方を巡禮して、朝はやく神戸の宅にかへつてみると、見知らぬ婦人が、私の歸りを待ち受けてゐた、初對面のあいさつがすむと「私は、こちらの日曜學校でお世話になつてをる、芳雄の母でございます、初めてお目にかゝつて、こんなことをお願ひ申す

ことは、まことに申兼る次第ですが、實は芳雄が一ケ月程以前から、盲腸炎をわづらひまして、その手術をしましたところ、どうも經過がおもわしくなくて、此頃になつて醫師は命が覺束ないと申されます、本人もウス〳〵死の近づいてをることを感付いてをる樣子でございますが、どうも私の口からそれを云ひきかすことが出來かねまして、――まことにぶしつけなお願ひですが、病院までお越しを願ひまして、たゞ一言でよろしうございますから、何か御法話をお聞かせ下さることは出來ますまいか」――とこみあげてくる涙を拭ふのであつた、誰れにしても、死を宣告するといふことは、悲痛と云はんよりも、寧ろ怖ろしい罪を犯すやうな氣がする、殊に親としては恩愛にほださるゝ身、どうしてそれが出來やう、出來ないのが當然である、たとひ本人が死を感付いてをるとはいへ、如何にも可哀相である、といつて生死出離の一大事、私としては拋つてをく譯にはゆかぬ、終に私は「よろしい、すぐ後から參りませう」と承諾をして、母なる人を歸らせた、早速朝飯をすませて、病院へ訪れて病室に入つてみると、白いベットの上にことし十一歳になつた、芳雄君が上向きに寢てゐる、傍には父なる人も母も妹も靜かに病人をみまもつてゐる、細い目でヂット私をみつめた芳雄君は、いきなり「先生――」と叫んで、なつかしさに堪へかねた風情で、暫らくは泣くばかりであつた、やゝ間をおいて、本人は私に向つて靜かに「先生、僕はもう死ぬのでせうか」とたづねる、私の胸ドキッとしたが、然し苦しい心持をかみころして答へた「そうです、芳雄君はもう死ぬのです、死ぬのは厭ですか」ときくと「ハイ僕は死ぬのは厭です」といふ、如何にも其通りだ、いつまでも生きてゆきたいといふ生存慾は、人間のあらゆる慾望の中で一ばん根強い、然も一ばん執念深い慾望である、尤もだと云ひたいが、「そうだらう、死ぬのは厭だらうが、死なねばならぬのですよ、然し死ぬのはね、こゝにゐられるお父さんもお母さんも、妹さんも、かくいふ私も、みんな死ぬのです、芳雄さん、いやでも今度は死ぬると決

死ぬのは厭だ

心なさい、しかし、あなたの肉體は死んで灰になつてしまふのだが、あなたのたましひは、今こゝで、いつまでも死なない無量壽の佛にしてもらふのです、芳雄さん、いつも日曜學校で誦げる正信偈に、歸命無量壽如來とありませう、あれは何時まで經つても死なぬほとけさまにしてやるといふことですよ、だから、今度あなたの肉體は死んでも、あなたの魂は佛樣になつて、極樂で思ひのまゝに樂しむことができるのです」といふと、芳雄君はすなほにうなづいて「分りました〳〵、歸命無量壽如來、南無不可思議光」と唱へ乍ら、手を合はすのでした、「その歸命無量壽如來も、南無阿彌陀佛も一つです」と云ひきかせると「アヽ、そうでしたか、南無阿彌陀佛〳〵〳〵」と、さも嬉しそうに念佛を稱へて、もう聊かも死ぬことを氣にかけぬ樣になつた、暫らくしてから「それでは、お母さんも、お父さんも、みんな一つところに來て下さるのだナア」とニコッと笑ふてをる、この時母なる人も、父なる人も、なんの返事もせずにたゞむせぶばかりであつた、其

俱會一所

ずがたをみて芳雄君は「お父さん、お母さん、なぜ泣くのです、僕と別れたら、もう二度と會へぬといふのなら泣いてもよいが、極樂へ參つて佛樣の處へ行くのですから、喜んで下さい」といふのであつた、こんどは「美代ちやん、美代ちやん」と、妹をよんで「先生と一しよに、讃佛歌を歌つて下さい」といふ、妹が「兄ちやん、何をうたひませうか」とたづねると、色は青ざめ、痩せ衰へた芳雄君は「み佛の子供」を歌ひませうといふ、妹は可愛く歌ひ出した。

讃佛歌をうたふ

みほとけさまのお子供は、母ちやん、姉ちやん、わたしらよ、
死なぬほとけにたれがなる、母ちやん、姉ちやん、わたしらよ、

私も涙ながらに合唱した、歌ひ終つて一同に唱名念佛する、私は嘗つてこの時のやうな緊張した場面に出會つたことがない、その後半時間程して私は歸つたが、芳雄君は其翌日の晩、臨終一時間前まで、歸命無量壽如來、南無不可思議光をくりかへして、念佛もろとも、死を見ること歸するが如き有樣でこの世を旅立つた

死なぬ佛になる

といふ知らせを得た。

死はこの世に於ける最も嘆かはしき事實である、違はざる約束である、やがて來たるべき道である、然るに一度如來のおめぐみに浴したならば、有漏の穢身はかはらずして、心は淨土に遊ぶ大安慰の生活に入ることを得るのであります。

第三講　如何にして救はるべきか

一、それでは、如何にして、その如來に救はるべきかといふに、それはたゞ如來に歸命すればよい、みほとけに南無すればよいのである。

歸命と南無

「歸命」、「南無」、どちらも、同じ意味です、南無とは梵語であつて、それを漢語に譯すると歸命となる、之を日本語に直すと、たのみにする、おしたがひする、おまかせする、といふ意味になる、卽ち、自己の全運命を、阿彌陀佛におまかせする、無量壽如來をたのみにする、不可思議光如來におしたがひすることであります。

本願招喚の勅命

二、この如來にしたがひ、うちまかせる、たのみにすることはどうすればよいか、このこゝろを、親鸞聖人は「歸命といふは、本願招喚の勅命に歸順する」ことである、といはれました、つまり、われらが、かうして、阿彌陀佛の御前にひざまづき、こゝろから頭をさげて禮拜合掌せずにをれないこの思ひ、やむにやまれないこの心は、これは果してどこから來てをるのであらうかを考へてみよ、この心の起つた源は、決して人間の思ひや凡夫の心から發つたものではないはずである、この心こそ吾等の知らない間から、すでに如來の救はねばおかぬ助けずばおかぬの、如來本願のみこゝろより流れて來ておる心からである、われら罪業深重の徒者が、かくも如來を、お慕ひせずにをれないのは、すでに吾等に先達つて如來の御心が、われらの心に入り込んで來て下さつてあるからである、卽ち其

根本は、如來のわれらを救はねばおかぬ、助けねばおかぬの「本願招喚の勅命」が、この心を發させ給ふからである、卽ち吾等の如來を拜む心は、拜ませて拜まれたまふ如來本願の御念力のあらはれである、こゝに、われらは如來本願の御はたらきを我身のうへに拜まずにはゐられないではないか、たへずはからうてをつて下さるみ佛を、我心のうちに信ぜずにはゐられないのである、依つて、聖人は、「歸命とはその如來の勅命に歸順するばかりである、釋迦彌陀二尊の仰せに隨ひ召に叶ふ」ことである、と仰せられたのであります。

勅命を聞くとは

三、本願招喚の勅命を聞くといふには、如來さまを、いつも西方十萬億土の遠い所に、ゐられるお方と心得たり、或ひは、佛檀の奥深いところに押し込めて、手に珠數かけて、有り難いとか、勿體ないとか、御恩さまとか云ひながら、その下から、すぐに他人の惡口を云つたり、あくびしたりしてをる無反省の所謂誤信者達にはなか〳〵この勅命は聞こえない、況んや、時代錯誤の賣談坊主の節入說教に陶醉して、ボンヤリと、ねごとのやうに稱へてをる低級の念佛者達に、どうして、この血の垂るやうな本願招喚の御勅命が聞こえやう。

心の耳を開くのだ

如來の勅命を聞くには、先づ、自分の心の耳を開かねばならぬのである、どうすることが心の耳を開くといふか、これは、到底自分の力では開かないから、如來の御力によるより外はない、如來は、われらがつんぼで、何もわからずに苦しんでをるのを、十劫の以前より可哀相と憫みたまひ、其つんぼをどうかして早く治療してやらうと、色々と御苦勞してゐて下さるのである、われらのつんぼはなか〳〵頑固で容易に癒らない、されど如來の晝夜不斷の御介抱で、光明の緣に護られて宿善開發して心の耳が開くのである、一度耳が開けば佛の御聲が一々明白に聞こえてくる、それが蚊のなくやうな細い稱名の聲も、雷霆のやうに響き渡るのであるから、殊更に聞かうとつとめなくても自ら聞こゆるから有り難いのである。

己れをみつめよ

四、まだ、如來の勅命が聞こえないのは、自分自身の心のみつめかたが足りないからだ、己れを凝視める己れを掘る、己れの三毒五慾を省みることが肝要である、自ら疑ふ心を掘つてみよ、物足りない心を、淋しい心を、喜ばれぬ心を、くらい心を、掘つて掘つて掘り下げてみよ、そうして地獄の炎の燃え上つておる所まで掘り下げると、その下から、其胸底から、血の垂るやうな南無阿彌陀佛が輝いてくるのだ、その念佛のうちから、「罪はいかほど深くとも……」「我能く汝を護らん……」「そのまゝ救ふ……」といふ御聲が聞こえてくるのである、この一念の時は、喚ぶ聲と、應へる聲とは一つである、「歸命の心」は、そのまゝ「本願招喚の勅命」である、こゝに如來と一つになつてしまふのであります。

南濱のおかる婆

五、江州の南濱のおかるが、老後、耳が遠くなり、說敎の座に出ても、聞こえかねる樣子ゆゑ、ある人が氣の毒に思ひ、「おかるさん、今日の說敎は聞こえたかい」と問へば、「はい、說敎はちつとも聞こえぬがな」と、我胸をたゝいて「如來

直感の聲

樣の、おかる助けるぞよの御喚聲なら、いつもかも聞こえづめでございますわい、內に居ても、仕事してをつても、聞こえどほしでございます」といつてうれし涙に咽んだそうである、肉體の耳はつんぼでも、心の耳のあいた人は幸福である。

そうだ、喚聲と云つても、人間の聲ではない、佛が永遠の昔より凡夫の心の底に來つて、いつもかも、罪惡のこのまゝを護つて下さるみ心の響きを、我心の耳に直感することである、いつも、如來と自分と、離れたものにして置いて、如來を探し求めるから、勅命も聞こえず、信も得られず、救ひも味はれないのである、機法一體の南無阿彌陀佛とは、如來が永劫の昔から、私の胸の奧深く喰ひ込んで、一つになつてゐて下さることをいふのである、こゝに救ひが味はれる。

不可思議光如來

六、また、阿彌陀如來は、不可思議光如來であるから、佛の正體はわれら凡夫にはわからぬが、われらの心のうちに寫つて下された姿は、佛は慈悲であり智慧である、堪へず光となつてわれらを照らしづめであるから、怒り、呪ひ、狂つた

心も、このみひかりの如來に接して、反省し、懺悔し、勇氣づけられて、たとひ浮世の荒波と戰ふても屈せず、人生の暴風雨に荒されても動かず、つねに如來の勅命を聞いて、力強くお淨土へまで進んでゆくのであります。

第四講　如來は如何にして顯はれ給ひしか

法藏菩薩因位時
在世自在王佛所
覩見諸佛淨土因
國土人天之善惡

法藏菩薩因位のとき、
世自在王佛の所に在して、
諸佛淨土の因、
國土人天の善惡を覩見して、

一、そも〳〵親鸞聖人のお胸のうちに、あらはれたまひし阿彌陀佛は、どんな

如來の顯はれ給ひし原因

具合にしてお出ましなされたのであらうか、私達がかうして如來を拜し、如來の大悲を仰ぐ身にして下さつた阿彌陀佛は、一體どんな法式で、われらの心にまで、お入り下さつて私を助けて下さるのであらうか、私達は、最も大切にこの如來のあらはれ給ひし原因と、その道程を考へねばならぬ。

二、たとひ、如來はたしかに存在せらるゝものであると聞いてをつても、その如來が「われは、かうしてをるのだ」「われは、かうして汝の心に現はれて來るのだ」と、如來自らがお示しくださらなかつたら、愚な私達には、いつまでたつても、如來を信ずることは出來なかつたことであらう。

三、私達は、いまお日樣を拜むことが出來る、しかし、お日樣が、お日樣自ら光を放つてくださらなかつたら、私達は永劫たつても、お日樣を拜むことは出來なかつたであらう、いま私達が如來を信じ、如來の救ひのみ聲が聞こえるやうになつたのは、全く如來が私達の心の中に現はれて、その救ひのまごまろをあらは

して下されたからではあるまいか。

私達は、今こゝに聖人の御導きにあづかつて、正信偈を通して、阿彌陀佛が、われらの心にまで、あらはれたまひし、生起と本末をうかゞふのであります。

因緣果の法則

四、もとより、われら人間は、すべて因果の法則のうちに生きながらへてをる事はいふ迄もない、故に世の中には偶然といふことは決して無いはずである、あらゆるものは、いづれもこの因緣果の道理の外へは一歩も出る事が出來ないのである、仍て、われらのすべての苦しみも、惱みも、罪業も、みなこれ過去世から造つたおのれの惡業の報いであつて、今更どうすることも出來ないのである、あがけばあがくほどます〳〵惡業が加はつて、苦しみが增すばかりである、そこでこの苦惱のまゝの衆生を救はんとしたまふ如來は、やはりこの因果の道を履んで、われらの迷へる業だましひの中に現はれて來なければ救ふことは出來ないのである。

如來とは

五、大體、「如來」とは、眞如より來生するといふ意味である、眞如とは卽ち宇宙の根本精神を指すのであつて、ならびなき絕對のまことをいふのである、單にまことといつても冷やかな道理といつた風のものでなく、眞實の智慧と眞實の慈悲を具へたまふまごころをいふ、それを、法身とも、一如とも、眞如とも、久遠ともいふのである、この絕對のまことが、われらの迷妄と、罪惡に沈むすがたをみそなはせられて、これを救はんといふ思召から、人格的に身を顯はされたのが如來である。

法藏菩薩

六、そこで、この眞如のまごころから、對手の人間を救はんためには、先づ人間的の法藏比丘とあらはれて、人間の履むべき因果の道をふんで、われらのうへに顯はれて下さるのであります、釋尊は、阿彌陀佛がこの世へ顯はれ給ひし因果的道程を、『大無量壽經』のうへにくわしく說かれて、

「過去久遠無量の大昔に、錠光如來といふ佛がこの世に出られて、多くの衆生を

世自在王佛

教化し濟度して、涅槃の境界にお入りなされた、それより次から次へと、五十二の如來がお出ましなされて、又々多くの有緣の衆生を救はれたのであつた」しかし無緣難化の私達は、惡業が深い爲にそれらの數多の佛に見捨てられて、終に今日に及んだのである、その次の五十三佛目に、世自在王佛と申す佛が世に出られた、この佛は四十二劫の間、この娑婆界に留らせられて多くの衆生を御濟度なされたのである、「其時に一人の國王があつて、この世自在王佛の說法を聞かれ、心に非常に悅びを感じ、自分も佛になりたいといふ志を發し、遂に己れの國もすて、王の位もすて、出家して、一修行者となり、名を法藏と號されたのである、高才勇哲にして世に超へたる御方であらせられた」、これぞ卽ち、三世諸佛の悲願にもれた、出離の緣なき私達を、見るに見かねた久遠の彌陀が(眞如)、もしわれまで見捨てたなれば、またいづれの佛のたすけたまはんぞとおぼしめして、久遠の古佛が人間的に姿をかへて、從果向因して下されたのが法藏菩薩である、これ

阿彌陀佛の前身

が正しく阿彌陀佛の前身であります。

七、ときに、法藏は、その師、世自在王佛の御所に詣でて、うや〳〵しく、跪き、合掌して、自分の希望を演べられ、「我れはこれより修行して、佛となり、一切衆生の苦を拔き、樂をあたへ、大安慰の身とならせたいと思ひます、この願を成就する爲には、たとひ、身を諸〻の苦しき毒の中におくとも、我が行に精進して、忍んで終に悔ず」といふ覺悟を示され、更に世自在王佛に白さるゝやう、「世尊よ、我はかやうな無上正覺の心を發しました、願はくば我が爲に廣く敎を說き聞かせ下さい、我はそれに從ひて修行し、速かに佛となり、諸〻の人間の、苦しみと惱みの根もとを、拔きとりたいと思ひます」と願はれました、この時、世自在王佛は、法藏菩薩に告げたまはく「汝自ら當に知るべし」と御答へなされた、卽ち、あなたはよく御承知の筈である、あなたの內證は久遠の古佛ではないか、よく御承知のことであらうと申されたのである、然し法藏は、「この義弘く深

くして我力ではわかりません、どうか諸佛如來の淨土の行を說き聞かして下さい、我れ之を聞きて、お說の如く修行して、自分の願を滿足しやうと思ひます」と、あくまで御內證を包んで熱心に願はれたのである、この時、世自在王佛は、法藏の志願の深くして廣く、徹底的なるを知ろしめし「それは、譬へば、大海の水を一人して、桝にてかひ出しつくさうと思ふなれば、千年でゆかずば萬年やる、萬年でゆかずば億年やる、こうしてやれば遂に底を窮めて、妙寶を得るであらう如く、人もし至心をもつて精進して、道を求めて止まずんば、まさに寶を得べし、何の願か成就せぬことがあらう」と激勵せられて、徐に、廣く二百一十億の諸佛の淨土の有樣や、それを建立せられた原因などを、手にとるやうに說いて聞かせ、なほ其上に、諸佛の國に生れてをる人々の善惡や、その國土の優劣なども、法藏の願ひに應じて、まのあたり之をお見せになつたのであります。

諸佛淨土の因

これによつて法藏は、諸佛の淨土にまゐる原因と、その結果によつて現はれた

國土人天の善

る國土と、而してそこに生れてをる人天の善惡を、事實の上に觀見せられたものであるから、自分の淨土を建設せらるゝ上に、大に參考を得られたわけであります、この意を「法藏菩薩因位時、在世自在王佛所、觀見諸佛淨土因、國土人天之善惡」と正信偈に讃嘆せられたのであります。

第五講　南無阿彌陀佛のすがたとなつて

建立無上殊勝願　無上殊勝の願を建立し、
超發希有大弘誓　希有の大弘誓を超發せり。
五劫思惟之攝受　五劫に之を思惟して攝受す、
重誓名聲聞十方　重ねて誓ふらくは名聲十方に聞えんと。

一、法藏菩薩が、かくの如く諸佛の淨土の因をたづね、その淨土を親しく御覽になつたのも、その目的はわれら衆生を、一日も早く苦惱のうちより救ひ出さねばおかぬとせらるゝ大慈悲のお心より外はないのである、それが智者や聖者を助けることなれば、それほど困難でもあるまいが、法藏の救ひのめあては、我等、穢惡汚染の惡人凡夫にあるのであるから、ひと通りの御苦心ではなかつたのである、諸佛の淨土をしらべても、善人が善を修めてゆく道は開かれてあるが、惡人が惡人のまゝで行ける淨土のあらう筈がない、といつて極重の惡人を、このまゝ捨てゝおけば、いつまでたつても助かる時はないのである、そこで、なんとかして、一切善惡の凡夫を、ひとしくこれを救ひつくさずば、我もまた佛の位にのぼらじと、實にこの上もない諸佛に勝れた願ひを建て(建立無上殊勝願)、十方の諸佛に比ひなき、弘き誓ひ(超發希有大弘誓)を、發されたのであります。

建立無上殊勝願、超發希有大弘誓

二、しかし、諸佛の淨土といへど、決してたやすく出來たものではない、法藏は、それらの諸佛の妙土の中より、劣なるもの粗なるものを捨てゝ、善なるもの勝れたるものゝみを攝めとりて(之攝受)我淨土を建設し、而してその淨土へ一切衆生を生れさせやうといふ大誓願であるから、なか〳〵普通の考へでは目的は達せられない、それゆゑ如何にすればよいかと、思惟工夫をめぐらされ、はからず「五劫」といふ長い年月を經られたのであります。

五劫思惟之攝受

「劫」とは梵語で、長時と譯し、天女が三年毎に一度天より下りて、其羽衣を以て四十里立方の石を磨つて、それを磨り盡すほどの長い時を一劫といふと譬へられてある、それに五倍した間の時間を五劫といふのであります。

三、そこで、法藏は、この五劫の思惟の結果を、最も具體的に、世自在王佛の所に於て白しのべられたのが則ち四十八願である、一々の願は、すべてわれらを苦しみと惱の中より救はんとせらるゝ思召よりほかはないのである。

四十八願

四、而して、この大願を成就せんが爲には、おのづから修行が添はなければな

兆載永劫の修行

らぬ、そこで法藏は願ひの如く修行せられました、それが、不可思議兆載永劫の間であります、その苦行のすがたを大無量壽經に、

「不可思議兆載永劫に於て、菩薩は、無量の德行を積み植えて、欲覺、瞋覺、害覺を生ぜず、慾想、瞋想、害想を起さず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して衆苦を計せず、少欲知足にして染恚、痴なく、三昧常寂にして智慧無礙なり、虛僞諂曲のこゝろなく、和顏愛語にして、意に先じて承問す、勇猛精進にして志願倦むことなく、專ら清白の法を求む……衆の行を具足し、諸〳〵の衆生をして功德成就せしむ」など說かれてあります。

十七願

五、かくて、法藏菩薩は、その五劫に思惟せられた本願も、兆載永劫に修行せられた功德善根ものすべてを、たゞひとつの南無阿彌陀佛の御名におさめいれて、それを四十八願中の第十七願目に「我れ佛を得むに、十方の諸佛をして、我が名號の威神功德の不可思議にして、いかなるものをも救ふことを說かしめて、其れを衆生に聞かしめ、以て信を得せしめん」と誓はれたのである、而して、又、さらに重ねて「我佛道を成るに至つて名聲十方に聞へむ、究竟して聞こゆる所なくば、誓ふて正覺成らじ」わが名聲、卽ち南無阿彌陀佛の聲が宇宙法界々に、聞こえぬ所があつたならば、此法藏は佛にはならぬと誓はれたのであります、この意を祖聖はいま「重誓名聲聞十方」としるされたのである、いかにわれらをして、南無阿彌陀佛の名號を信ぜしめ、其名號の大善大功德を與へて、往生成佛せしめんとせらるゝ、大慈大悲の大御心であるかが窺はれるのであります。

重誓名聲聞十方

十劫成佛

六、かくて、法藏菩薩は、今をさること凡そ十劫を歷る昔に、大願は既に圓滿に成就して、救ひの大御力は出來上つて、いとも尊き南無阿彌陀佛といふ佛と成られたのであると釋尊は仰せられました、しかも、「重誓名聲聞十方」の誓ひは空しからずして、私達は、いま現に此御名を聞きこの御名を稱へてをる、この南無阿彌陀佛のなかに、法藏菩薩のあらゆる御誓願も、あらゆる御修行も全て具へら

れてあるから、私達の惡業煩惱の心の底に、いつの頃よりか如來を慕はずにをれなくなり、衷心から如來を念じ、如來をたのまずにをれない願往生心のこゝろが湧き上つてきたのである、この心こそ、法藏菩薩のわれらを救はねばおかぬ、生かさねばおかぬの御本願の御心より起さしめたまふものである、かく信じてみれば、どこに我が計らひや、自力をさしはさむ餘地があらう、たゞ深厚なるお慈悲を仰いでよろこぶばかりである、この南無阿彌陀佛こそ、我救ひの親であり、御名であり、信心である、この六字の外に助かる由れも參れる由れもないのである、蓮如上人は『御文章』に「阿彌陀佛のむかし、法藏比丘たりし時、衆生佛にならずば、我も正覺ならじとちかひましますとき、その正覺すでに成じ給ひしすがたこそいまの南無阿彌陀佛なりとこゝろうべし、これ卽ち、我等が往生の定まりたる證據なり、されば他力の信心獲得すといふも、たゞこの六字のこゝろなり」と示されました。

親鸞一人のためなり

かくして、如來は私達の心の中に南無阿彌陀佛のすがたとなつて顯はれて下されたのであります。

七、親鸞聖人は歎異鈔に、「彌陀の五劫思惟の願を、よく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と仰せられて、如來の五劫の思惟兆載永劫の修行を、我身一人に引きうけて喜ばれました、このお言葉は、日野左衞門の軒下に石を枕に一夜を明かされた時、御弟子西佛房と共に、お悅びなされたお言葉であると傳へられてあります、卽ち聖人常陸の國を旅したまふに、ある夜、日野左衞門の家に一夜の宿を乞はれたが、左衞門はむげにこれを斷つた、そこで聖人はこの夜、軒下に石を枕にして念佛と共にまどろませられたその時、つく〳〵思ひ給ふらく、この世にありては、かやうに一夜の宿も借してくれ手のないやうなこの身を、永劫の昔から、助けずばおくまい救はずばおくまい、とかゝり果てゝゐて下さつた法藏因位の御苦勞を思ひめぐらすと、この世の苦勞が反つて、如來の御慈悲を喜

石の枕の法悅

ぶ御縁となつて、如來の本願の事が思はれて、西佛房と共に、ふかき御恩に泣きむせばれたのであります。

八、聖人の御一生の間、種々の迫害の中に、いつも泰然として安住して居られたのは、全くこの如來本願の大信念に住してゐられたからである、人が顧みなくても、世が捨てゝも、それに不平の云はるゝ自分ではない、かやうな罪深い身を見込んで助けて下さる彌陀の御本願の尊さを思ひ、五劫思惟と、兆載の修行を味へば、世の迫害が強ければ強いほど、この如來の御恩に感泣せずにはゐられなかつたのである。

法然聖人の法悦

九、また法然聖人は常にお經を誦げらるゝ時に「五劫思惟」の文に當らるゝと、いつでも聲を出して泣きだされ、次の御文が誦げられなかつたといふ、御弟子が「五劫思惟」といふことが、なんでそんなに有難いのでありますかとお尋ね申上げた所、聖人の仰せに「この愚痴の法然房、十惡の法然房一人を助ける爲に、五劫

といふ長い間、思惟をこらして下されたかと思へば、御慈悲の程が身にしみて、われは泣かずには居られぬ」と申されたさうである。

自己一人の問題

一〇、すべて宗教を味ふには、常にこれを自分一人の心の問題として味はねば、いつまでたつても、信仰は得られるものでない、或人の自督に「私は、今まで、本願といふことを遠い所にあるやうに思ふて居つたが、よく〳〵聞かせて頂くと、本願は、私の心の中で、もじ〳〵してをられました」と、喜ばれたことがある、其時私は「そうだ、あなたが、さう氣づいた時は、もう本願の船に乗せて頂いた時である」と、有難涙にむせんだことがある。

一一、世の中には、助かる道を、十年も二十年も求めたり、本願のよび聲を、十萬億土の遠方にまはしたりして隨分苦しんでをる人があるが、如來の救ひを求むるにはそんな遠い彼方に向ふ必要はない、如來のお慈悲は我が踏みしむる足下に味はれる、やるせない大悲の泉は眼下に湧いてゐるのだ、おさゆる兩手のわが

本願は我胸にもぐ〳〵

胸にもぐ〳〵してゐらるゝではないか、法藏菩薩の五劫永劫の御修行の場所は、印度でもない支那でもない、アメリカでもないフランスでもない、また我らの住んでをる日本でもない、貪慾、瞋恚、愚痴と、永劫の間亂れてやまぬ我が胸底こそ、法藏菩薩の御修行の御舊蹟である、十劫曉天のいにしへに佛になり給ひし正覺は、この眞暗な私の胸をさしおいてどこにあらうか、如來が法藏となつて「衆生往生せずば、我も正覺をとらじ」といふ大願の活躍したまふ本舞臺は、「一切群生界のこゝろ」卽ちこのこゝろ、この眞暗なわが苦惱のこゝろの上であつたのだ、卽ち衆生往生の外に彌陀の正覺の生命はないのである。

一二、かねて七里和上の膝下で眞劍に道を求めし一學生が、或日、和上のもとを別れんとして、「私は三年前よりお手篤きお育てを蒙り一生懸命道を求めて來ましたが、未だに如來のお助けに觸れることが出來ませぬ、宿善が到來せぬといふものか、私の未來は地獄行としか思はれませぬ、之も致方がムいませんから、一

先づ鄕里へ歸らせてもらひます」と申し出た、和上は「ナニお前は地獄へ行くと云ふのか、まちがひなく地獄へ行くと云ふのか、そうか〳〵、その地獄ならでは行くべきかたのない者を、救はせてくれと仰しやるのに、それでもお前は地獄へ行く氣か」、學生曰く「それは、よく心得ておりますが、どうも御緣が……」、和上曰く「緣がないとは、六字のすがたが近頃になつて變らせられたといふのか、罪業深重のその機に、緣がないとは何時如來がおつしやつたか、それとも御緣がないといふのは、お前から彌陀に緣を切るといふのか……親から緣の切れぬのに、お前から緣を切る氣か……」學生曰く「その御慈悲の程はよく分つてをるのですが、私の心がどうも……」和上曰く「お前の心が斷りを云ふと云ふのか、そのお前の心のことわりは、もうおそいぞ、阿彌陀佛の五劫思惟のその時に何故、お斷りを云つておかぬか、兆載永劫の御修行の時にだまつておいて、今更六字が出來上つた上で、緣は切り度うても斷りはたゝぬぞ、……南無阿彌陀佛の六字

斷りはもうおそい

の中から、お前の地獄行丈けは勝手にぬかれもせねば、斷りもたゝぬ」と申された時、學生もはじめて本願の深さに打驚いて、救はれる身になつたといふことである。

一三、要するに、われらのすべての苦しみも惱みも、如來はすでに法藏の名によつて自分の問題として苦しみぬき惱みぬいて、南無阿彌陀佛となつて、いまわれらの上に向つてをらるゝのであるから、われらがいま南無阿彌陀佛の御名を念ずる時、この念佛の中に、法藏菩薩も五劫思惟の御苦勞も、兆載永劫の御難義も、生き〳〵と我心のうちに働いてゐて下さることを覺ゆるのである、われらは、この法藏の御念力によつて生かされ、この南無阿彌陀佛の御名によつて救はれてお淨土へ往くのであります。

第六講　みひかりの如來

普放無量無邊光
無礙無對光炎王
清淨歡喜智慧光
不斷難思無稱光
超日月光照塵刹
一切群生蒙光照

普く無量無邊光、
無礙、無對、光炎王、
清淨、歡喜、智慧光、
不斷、難思、無稱光、
超日月光を放つて塵刹を照す。
一切の群生光照を蒙る。

一寸先はやみ

一、私達の毎日の生活を、ふかく考へると、殆んど一寸先はやみである、闇の中で動いてゐるのが人間である、アチラにゆきあたり、コチラにぶつつかり、左へいつては頭をうち、右へいつては鼻をうち、意外なことにおびやかされて、衝

突、衝突また衝突、つきあたりどほし、つまづきどほしである。

二、また、心のうちを省みても、本當にまつくらがりである、怒り、悲しむ、怨む、殊に、今にも襲ふてくる死を思ひ浮べると、身ぶるひするほどの黑闇が、感じられてくるではないか。

三、釋尊は、この底知れぬ闇の根本を、無明と仰せられた、親鸞聖人は、このいやらしいやみの世界を、三途の黑闇とかなしまれた、聖人は、このやみに閉ざされてゐるわが心のうちに、どれほど明るいみ光をお慕ひなされたか、おそらく、親鸞聖人ほど、くらい心のうちをみつめられて、生涯光明を求められたお方は、またとあるまいと思ひます。

聖人の本尊は光明の佛

四、聖人は、つねに、お住居の上段に、「歸命盡十方無礙光如來、南無不可思議光光如來」としるされた、九字十字のお名號を本尊としてかゝげられ、傍らに、善導大師と法然聖人の御繪像を懸けさせられ、その御本尊とその御繪像との前にひ

ざまづいて朝な夕なに靜かに合掌念佛せられたと傳へられてあります、聖人がかく、繪像、木像の如來を本尊とせずして、特に、盡十方無礙光如來、不可思議光如來の光の如來に親しまれ、また御師、法然聖人と善導大師を、お慕ひなされたお心もちは、いかにも型をはなれ、偶像に囚はれず、最も自由に、しかも人間的に、眞實の如來に接してゆかれたおすがたが、本當に衷心からなつかしく偲ばれます。

大經所說の十二光佛

五、釋尊は、大無量壽經のうへに、阿彌陀佛の御德の廣大なことは、なか〳〵口に述べつくすことは出來ないが、その最も著しい點を擧げて、十二の光の如來として、十二光佛のはたらきを述べられてあります。

「無量壽佛の威神光明は、最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶあたはざる所なり、是の故に、無量壽佛を、無量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日

月光佛と名づけたてまつる」と。

しかし、これは、如來の光明が別々に十二種あるといふわけではなく、阿彌陀佛一體の光明の德を、十二方面から稱讃せられたのである、いま、これを本偈のうへに、普放無量以下一切群生蒙光照と鑽仰せられたのであります。

普放

六、「普放」とは、普ねく十方世界に隈なくみ光は輝いてをるといふことであります、いま十二光の意味を、簡單にうかゞひますと、

無量光

第一に『無量光』といふは、阿彌陀佛の光明が、過去、現在、未來の三世にわたりて量りない時間に於て、われらのうへに、はたらき給ふおすがたである、即ち、私達の過去、無始曠劫の昔より、お淨土へ往くまで、はぐくみ育てゝ下さる光明であります。

無邊光

第二に『無邊光』といふは、彌陀の光明は全宇宙を照して邊りなく、平等一切に輝き給ふおすがたである、たとひ、如來を知つたものも知らぬ者も、いかなる

境地にさまよへるものも、たとへ外教の人でも他宗の人でもへだてなく、彌陀のお救ひに漏れるものは一人もないことをあらはされたのであります。

無礙光

第三に『無礙光』といふは、物質にも、精神にも、また、善惡二道にも、われらの煩惱惡業のうちにも、礙りなく到りとほつてくださる光明であります、親鸞聖人は、『尊號眞像銘文』に、「無碍といふは、さわることなしとなり、衆生の煩惱惡業にさへられざるなり」と申されてあります、天親菩薩は、この光明を、人格化して「盡十方無礙光如來」と稱讃して、信仰の對象とせられました、わが聖人が日常禮拜せられた如來も、前述の如くこの光のみ佛を本尊とせられたのである。

無對光

第四に『無對光』といふは、如何なる諸佛の光明も、阿彌陀如來の光明に對比することの出來ない、恰も、太陽の出ない時には、星も月も電燈もそれ相應に光つてをるが、東天に朝日が昇れば、太陽の前にはすべての光を失ふ如く、色々の神の光も道德の光も、阿彌陀佛の救ひの光には對比することの出來ない絶對性を

示されたのであります。

光炎王

第五に『光炎王』といふは、また「炎王光」とも申し、われらが、地獄、餓鬼、畜生、の三途の世界に苦しんでをつても、その黒闇をてらし給ふみ光であります、大阿彌陀經には「諸佛の光明の中の極明なり、光明の中の極好なり、光明の中の極雄傑なり、光明の中の快善なり、諸佛の中の王なり、光明の中の極尊なり、光明の中の最明無極なり」と說かれて、この炎王光のことを鑽仰せられてあります。

清淨光

第六に『清淨光』といふは、私達がつねに、性慾、財慾、名譽慾、食慾、怠惰慾などに煩はされてをる、この汚れたる心の垢をおとして、たへず清く純化して下さる光明であります。

歡喜光

第七に『歡喜光』といふは、吾等の、瞋り腹立ちの心のうちにあつて、この煩惱を退治し、おのづから慚愧の心を起さしめて歡びの心に轉ぜしめ給ふ光明であります。

智慧光

第八に『智慧光』といふは、吾等が常に愚痴の心に囚はれて、因果の理法を忘れてをるのを、如來は、いつも私の中にあつて、嚴正なる批判と反省を促して、暗い煩惱の中へ、明るい智慧の燈を與へて下さるのであります。

この清淨、歡喜、智慧の三光明は、吾等の心のうちに於て、いつも意識的に、靈感に觸るゝことが出來るのであります、これは、つまり第三の無礙光如來の用きを最も具體的に顯はされたものである、聖人は、和讃に「無礙光佛のひかりには、清淨歡喜智慧光、その德不可思議にして、十方諸有を利益せり」と、讃嘆せられてあります。

不斷光

第九に『不斷光』といふは、如來の光明は、いつも斷絕することなく、われらが如來を憶ふてをる時も、忘れてをる時も、常恒不斷に照らし給ふみ光であります、故に、人間は獨りでをる時は片時だつてない、われらはひとり惱んでをること

難思光

とは一時だつてない、いつも如來といつしよにをるのであります。

第十に『難思光』といふは、阿彌陀如來のお德は、我々の思慮分別の及ぶ所ではなく、われら人間の常識や概念の世界を超越せられてをる卽ち佛格の光をあらはされたものであります。

無稱光

第十一に『無稱光』といふは、吾等の言葉や文字で、如來のお德を說明することの出來ない不可稱不可說の光明の如來にましますことを顯はされたのであります、曇鸞大師は、このおすがたを「南無不可思議光如來」と仰がれて信仰の對象として合掌せられました、親鸞聖人もまた、この九字の名號を本尊として拜まれたのである、卽ち絕對絕妙のおすがたに歸依せられたのであります。

超日月光

第十二に『超日月光』とは、吾等の世界に於て、光の最もすぐれたるものは日月の光であるが、其日月の光は、私達の外側は照すが、內側の心の中までへはとどかない、阿彌陀佛の光明は、その日月の光以上に超越して、われらのうちなる暗黑を照し給ふ故に超日月光といふのであります。

照塵刹

阿彌陀如來は、かくの如く、われらの煩惱惡業の塵に穢れてをる國土を照らして下さることを、正信偈に「照塵刹」と、記されたのであります。

一切群生蒙光照

七、この如來の光のお照しを蒙るものは、上下、貴賤、賢者、愚者、善人、惡人の隔てなく、たとひ如來を謗つたり反逆したものも、元よりお慈悲を喜ぶ者も喜ばぬ者も、信ずる者も信ぜぬ者も、一人としてお漏らしはないのである、この意味を、いま正信偈に「一切群生蒙光照」と仰せられたのであります。

第七講　光明の靈感

光明の體

一、佛の光明といつても、青黃赤白とピカ〳〵光るものではなく、つまり、佛の心の光を、光明といふ言葉をもつて表現されたのである、依つて、光明の體は

如來の智慧の御心が根本で、その一面に於て、慈悲の御心がはたらきたまふをいふのである。

色光と心光

二、龍樹菩薩の智度論には、阿彌陀佛の光明の相を、色光と心光との二種に分ちて、佛の御身より放ち給ふを色光といひ、佛の御心より輝き給ふを心光と說かれてある、故に、色光は淨土に往きて生身の佛を拜まぬかぎり、現世に於て吾らの肉眼では拜することは出來ないのである、しかし心光の方は、われらの信の眼を開きさへすれば、いつでも拜することが出來るのである、吾等が心の中に、惡を惡と知り、その罪の穢れを知り、また人生の無常を知り、苦しみを苦しみと知つて、心の底から、佛の大悲を求めずにおれなくなつた心持が、卽ち佛の光明の御催しであることが知れてくるのであります。

光明に觸れることは

三、清水氏の書かれたものゝ中に、如來のお慈悲を聞いて自分の罪を罪と知り初め、その罪を悔て、新しい清らかの生涯を望むやうになつたのは、これ全

く大靈の光りに照された證據である、これが卽ち大靈廻向の至誠眞實の要求心である、この眞實心、卽ちこの光りに觸れながら「此世は、どうせ虛僞の世界だから……」と云ふ風に、やはり同じ虛僞の道を辿るならば、如來の大命を侮辱するものだと書いてあつた、いかにもそうだと肯かれる。

これは大分古い話であるが、或る日、二十七八の女性が突然訪ねて來て、「私は此頃、自分の一身上の事から、大變に惱みまして、どうしてよいか解りませんから、お伺ひに上つたのですが……」と、そしてその身の上話を次の如く物語るのであつた、「私は、十七歲の頃藝者になり、廿四歲迄その商賣を續けて居つた者ですが、ふとした機會から、或人に落籍されて妾になつたのでムいます、小さな家を借りて、月々主人から送られる金で年老つた兩親と妹とを養つて居りました、處が一方、主人の家では奧さんが肺病に罹つて、主人の妾狂ひを大變氣に病んで段々病が重くなるばかりでムいました、私は此事を聞いてから、自分が恐ろ

藝者より妾へ

しい罪を犯してゐることを知り、人知れず惱み始めました、ところが、偶〻或る念佛信者に出逢ひまして、只念佛よりほかに此世には眞實の慰めはない、其念佛といふは、悲しい時は悲しいまゝに、淋しい時は淋しいまゝに、唯南無阿彌陀佛と稱へるほかに何も六か敷ことは無い……只佛樣にひしとすがるばかりである……と聽かされました、私は思ひがけなく、こうした話を聞いてから何となく佛樣を暖かい慈悲深いお方のやうに思ひ、深い事は分らないけれど、只念佛を申すだけで胸の中がすつきりするやうに思はれました、其後暫らくしてから、また其念佛信者に出逢ふと、佛樣は常に吾等の上に臨んで、衆生の苦惱は我苦惱であり、衆生の安樂は我安樂であると、いふことを聽いて以來、佛樣が自分の主人であり戀人であるやうに思はれ出しました、そこで私は此世に於て自分が一番幸福な身の上だとさへ思ふやうになりました、そして自分の其嬉しさを他人に迄頒けてあげたいと思つた位に喜びました。

念佛を申して良心に責めらる

ところが、或頃から、念佛を申さなかつた時よりも一層深い悲しみと寂しさが襲ひかゝるやうになりました、それは自分が妾であると云ふ事と、主人の奥さんの病氣とが、堪へ難い程に私の良心に喰ひついて、念佛を申せば申す程、一層苦しさが增すばかりでムいました、私は此苦痛を兩親に氣取られたくないと思つて込み上げてくる涙を飲み込んで、踊つたり三味線をひいたり唄つたりいたしました、けれども私は泣かずにゐられませんでした、兩親も妹も私が狂人になるのではないかと心配いたしました、それを知つた私は猶更に惱みとほしてをります……と訴へるのであつた。

四、私はこの話を聞いて、恰も自分の胸に祕してゐる恐ろしい罪でも暴露されるやうに戰慄をおぼへた、然し、私はどうかして此女性の苦痛の幾分かを取り去つてやりたいと思つた、さうする事が私自身の苦痛を輕くし、私自身を救ふことであると考へた、そこで私はすぐに「それは、あなたが妾をやめないうちは、其

苦痛から遁れることは出來ないであらう」と告げたのである、所が彼女は「私は幼少の頃から、左の肩の骨に疵を持つてゐるために難儀の勞働は、とても出來ないのでムいますし、また針を持つ事は少しも知らないものですから、今妾をやめれば乞食になるより外に道がありません、私は乞食になつても自分の願が通るのだから、却つて嬉しいやうに思ひますが、兩親も妹も共に乞食にするには忍びません、ですから又もとの藝者になるより外に道が無いやうに思はれます、しかし藝者になれば、又澤山の男をだまして行かねばなりませんから、さう思ひますと、やはり藝者にもなりたくはありませんし……」と、いふのです、私も一々尤もだと思ひ、兎も角、此問題を如何に解決すべきかを深く考へた。

五、 いまこの女が、佛の大悲が味はれ出して、自分の罪を知り始め、自覺しつゝあるといふことは、たしかに如來の光明に照されたからである、この女が其罪を悔て、新しい清らかな生涯を望むのは、それは全く如來の導きのあらはれである、この女がかくも眞實に智惠の光に觸れてゐるのをみて、「この世は、どうせ娑婆世界だ、僞りの世の中だ、どこまで行つても罪である、そこで如來におまかせするばかりでないか、如來は罪のそのまゝを救ふて下さるのだ、此世では到底清らかな生活は出來ない、何事も業だとあきらめて、現在與へられたる生活を味ひ、その淺ましい罪から遁れることの出來ない自己の姿を思ひつゝ、其まゝ救ふぞよのお呼び聲を聞いて懺悔と感謝で暮すばかり……」といふ風に、どうすることも出來ない世の中だから、やはりいまの僞りの道を辿りつゝお念佛せよと云ふことは一般僧侶のにげ口上であるまいか、この眞劍に心の內より溢れ出やうとする如來廻向の光明を、どうしてふみにじつてしまはれやう、所謂、眞宗の誤信者のおちいる穴はこゝである、私はそんな、安つぽい諦めや、型通りの虛僞の假面をかぶつてはゐられない、こんなところで、そのまゝながらのお助けの押賣りは出來ないのである、といつて「今直ぐに乞食におなりなさい、餓死なさい」とは、

云はれない、そこで、私はこの女性を救ふ救はぬといふ問題よりも、先づ、私自身の信念の聲に耳を傾けざるを得なかつた、わが如來の導きの聲、私は私の信念より「かくせよ」と命ぜらるゝまゝに進まねばならぬ、そして、そのやつた結果が良からうが惡からうが、それは人智によつて測り知ることは出來ぬ、その一切の責任は如來が引き受けて下さるのだ、「そうだ、如來の大命に背かないやうに彼の女がまじめに獨立して、生きてゆけるだけの職業を探ねてやるより外に道はないのだ」私はかく決心した、それから二三の友人の所へ相談に出懸けた、そは餘りにものずきだといふ反對もうけた、嫉妬もやかれた、然し自分は如來の命じ給ふところに突き進み、眞實の一路を辿つたのである、毀譽褒貶、誹謗擯斥、豈意に介すべきものあらんや、我等は寧ろ、只管絶對無限の我等に賦與せるものを樂まんかな、の先輩の語を口ずさんで進んだのである。

六、それから、その翌日の午後であつた、彼の女はだしぬけに「私は、長唄の師匠にならうかと思ひます」と云ひ出した、「私は小さい頃から、聲がよかつたので、師匠から長唄をよく仕込まれた者です、そして藝者になつてからは長唄藝者の名まで取つた程、長唄に對して自信がムいます、けれど妾になつてから、スッカリやめてゐたのですが、今度の事件に際して、何の職業も出來ませんから、決心して長唄の師匠にならうと思つたのです、そして私の近所に第一流の長唄の師匠がゐるものですから、そこへ訪ねて行つて、自分の身の上や、自分の決心を話した所が、師匠は大へん同情して、上手にさへなれば私を第二代目にするとまで、のり氣になつてくれました……」と、それより彼の女は主人とすつぱり手を切つて、いのち懸けになつて長唄の稽古に沒頭するやうになつたのです。

然し一方には、彼の周圍から色々の事件が持ち上りました「今迄は並々ならぬ恩を受けながら、今になつて手を切るとは何事だ、人非人……」、又家庭の者からも「折角の金の取れる道を捨てゝ、道樂商賣をするとは……」などと、色々

の點から迫害をされました、殆んど忍ぶ事の出來ぬやうな迫害もうけたのであつた、けれども、それらの迫害は、彼女の信念を益々堅くするばかりであつた、彼の女は、いつも私に告げました「何事も、如來さまが良いやうにして下さいます」と、彼女の微笑は崇高でありました。

其後、けなげにも彼女の奮ひ立つた力は、さながら電流のやうに、遠い彼女の生れ故郷に通じ、その力は彼女と、同じ妾生活をして、歎き悲しんでゐた或女性の胸を奮ひ立たせて、その女を自分と同じ獨立の道に引き入れて、念佛の信者にみちびいた。

私は、この二人の女性の前途を祝福してやまぬ、實に一人のめざめは、萬人のめざめである、これに依つて肺病の奥さんも救はれ、主人もやがて救はれてゆくであらう。

七、かくの如く如來の光明は如來の智惠の光であるから、われらの生活のどん

底まで見ぬかせられ、今迄の闇黑が追々に明るくなつて、自分の缺點がいよ〳〵明らかに知られて、或る時は、强い自己反省となり、或る時には、徹底的自己批判となつて、つねに自分の生活の是非善惡を明らかに見わけてゆく裁判官となつてくださるのである、然し、この鋭き智慧の光のうちには温かき慈悲の光の輝いてをることを忘れてはならぬ、慈悲から出た智慧、智慧から出た慈悲の光によつて私達は育てられ、救はれてゆくのであります。

八、豐前の西福寺の紫雲玄溟和上は至つて癇癪の强い人であつた、或る日、法會を營んだ時、弟子の皆應といふ小僧が、佛前に御燈明をあげやうとして、あやまつて油皿をひつくりかへした、所が飾りたてゝあつた其日の前卓の打敷がべたべたになつてしまふた、之を見た和上の癇癪は破裂した、人目も忘れて皆應の頭をなぐりつけて、「皆應、ささまは、なんといふあつかましい奴だ！」と怒鳴りつけた。

和上は暫し其よごれた打敷を見つめてゐたが、やゝあつて、和上の兩眼から熱い涙が流れ出した、和上は懺悔して內陣に跪き念佛もろとも「皆應、堪忍してくれよ、俺が惡かつた、勿體なくも佛弟子の頭をなぐつてのう」と申された、其の時、この姿を見てゐた者は皆念佛して涙にむせんださうである。

これは名高い話であるが、私はこの話を聞いていつも感じます、皆應がかへした油は佛前の美しい打敷をべた〳〵にした、皆應は玄溟和上から其粗忽を叱られた、而して、玄溟和上は更に大きな、而も見にくい油皿を覆へされたのである、和上の癇癪の油は、この嚴かな御法會の全體をめちや〳〵にしてしまつた、和上はこのときこの刹那に、大悲の親樣からお叱りを受けて驚かれたのである、佛の目の前でこんな粗忽をせられた和上の心から「玄溟、お前は、なんといふあつかましい奴だ……」と、智慧の光明の鋭く光つて、その御聲をきいて驚かれたのである、この奴の爲に大悲の親樣が無量永劫御苦勞あそばして下されたのかと思へば泣かずには居られない。

蓮元慈廣師の道歌

九、江州の蓮元慈廣師の歌に「癇癪は持つて生れた鈴の玉、あたるさわると鳴るぞかなしき」「その玉の中に他力の信ありて、また鳴りもどる彌陀の名號」といふのがある、私は、宗教的生活の妙味は實にこゝにあるのであると思ひます、そこに大慈大悲の光明と名號を仰がずにゐられません。

照育と遍照

一〇、而してこの如來の光明はわれらの知らない間から、卽ち十劫正覺の曉より、吾等の暗い心の底に來つて、照らし、はぐゝみ、育てづめであります、この間を照育の光明とも遍照の光明とも名けます、而して、吾等はかくまでも照らされづめ、育てられづめであつたことを氣づく一念に、救ひとげられるのであります、卽ち如來の光に依つてかくまでも攝取せられ捨てられぬ身であつたかと、自覺した心境を、攝取の光明に遇ふたとも、お救ひにあづかつたとも、助けられたともいふのであります、依つて私達が助けられるといふことは、私達からいま

お慈悲に入り込むのではなくて、已にお慈悲に入り込まれてゐることに氣づかせて頂くばかりである。

赤兒がすや〳〵と眠つてゐる時も、玩具と遊んでゐる時も、母親は常に側を離れないで、蚊を追ふ團扇の手をやすめぬやうに、如來は私の知らない間から私の爲に泣き私の爲に苦しんでゐらせられたのである、かくまでに私の爲にかゝりづめでゐて下されたかと目醒める一念に、眞實の親心を知り、如來と一つになつたことが味はれ出したことを信仰といふのであります。

われらの知らない間から

第八講　名號の感得

本願名號正定業　本願の名號は正定の業なり。

一、聖人は、人間のわれらが、如來に救はれて、お淨土へ參らせていたゞくことは、吾等の力や、はからひによつて救はれるのでなく、たゞ〳〵如來の、救はねばおかぬ助けずばおかぬの「本願」ひとつによつて救はれるのである、そして其本願の御心が直接私達に觸れて下さるものがら、卽ち、如來の衆生を救濟し給ふ方法として「光明」と「名號」とを以て助けてくださることを信じられたのであります。

本願

二、『大集經』に依れば、諸佛が衆生を救濟する方法としては、光明と、名號と、神通と、說法と、の四方法をとられるのである、其中、娑婆の敎主釋迦如來は、神通と說法との二方法に於てせられたのである、淨土の阿彌陀佛は、光明と名號の二方法に依つて衆生を濟度せらるゝのであるから、最も諸佛に勝れ給ふのであることが明されてあります、この世に出現せられた釋尊の如き應身佛なれば、神通を拜み、直接說法を聽いて救はるゝことが出來やうけれど、いま淨土にましま

救濟の二方法

K君と子供

す報身の阿彌陀佛は、先づ光明をもつて、照し護り、疑ひの闇を破つて、說法そのまゝの名號を、聞信させて私達を救ひ遂げて下さるのであります、實に、この光明と名號こそ、他力救濟の一大機關であつて、また原理であります、そこで、前の句に於て光明の力用を示され、いま爰では「本願の名號」のはたらきを顯はされたのであります。

三、K君が結婚して八年目に、可愛い男の兒をもうけた、一家擧つての大喜びである、手の上の玉のやうに大切に育てゝをる、私は先日、五年振りに其家をたづねた、K君は語る「君、親といふものは、我が子にかけたら、殆ど馬鹿のやうだよ、何につけても、先きから先きへと案ぜられてね、他人がみたら、本當におかしいだらう、以前に君をむかへた時に有つた、この庭園の蓮池は、こいつが遊ぶ時に、もし落ち込んだらと思ひ出すと心配でならぬから、この通りに埋めてしまつたよ、また周圍の竹垣も、こいつが目を衝いてはならぬと思ふて、この通り土塀に作り直したのだ、机の角で頭を打つてはならぬと思ふて、圓いのに置きかへた、乳は充分にあるのだが、母親が弱いから滋養分を與へてをる、着物は矢張り洋服がよく似あふよ」と、中々話が盡きなかつたが、最後にK君は「早くこいつが、お父さん、お母さんと云つてくれだしたらと思ふよ」とつけ加へた「あゝさうだらう」と、答へた私の胸は一ぱいにつまつてきた、いま如來さまから、「光明」をもつて照護せられ、名號をもつて救はれてゆく私達のすがたも全くこの通りである、もし、このお護りと、このお救ひがなかつたら、私達は一日も生きてゐられないのだ。

親心は子の心の上にみる

四、「はへば立て、立てば歩めの親心」といふことがあるが、親心は實に子供の成育の上に結晶されてゐるのである、子から離れて親のお慈悲がどこにあるかと探したつて、決して親心は分るものではない、子があればこそ味へる親の慈悲である、してみれば親心は直ちに子供の上に求むるより外にはないのである、生れ

て箸持つ事も知らぬ小兒が、次第に生長して、這ふやうになり、歩くやうになり「おかあさん」と呼び、片言まぢりにでも話の出來るやうになる、そこに無限の親心があり〳〵と顯はれて居るのである、幼兒の成育、それがそのまゝ親の慈愛である、死すべき小兒が死なずに育ち、這ふた子供が歩むやうになり「お父さん、お母さん」と語るやうになる、これ程明らかな慈愛がどこにあらうか。

五、私達は如來の御慈悲を他に求めてはならぬ、今までは南無阿彌陀佛の功德も知らず、大悲の涙も辨へなんだものが、いつの頃からか心の中に淋しみを感じて、宗教の話を聞くやうになり、お説教でも聽聞したい氣も起り、いつとは知らずに、親の御名、南無阿彌陀佛を口に浮べるやうになつたのは、實にこれ、やる瀨ない親のお育てがあつたればこそである、而もそれが可愛いといふだけの慈悲でなくて、曠劫このかた、この私一人を立派な佛にしてやりたいの御本願である、「衆生往生せずば、我も正覺取らじ」と誓ひ給ふた「本願」が、いま私の上に顯はれてかやうにならせて頂いたのであります。

六、これは、熊部氏の話であるが、或る道友の懺悔話に、「自分は少い時から永い間放蕩を續けて、非常に親に心配をかけて來た、或る時、親族一同が集まつて自分の事に就て會議を開いた、こんな放蕩息子はとても末の見込が無いから、今の間に禁治產してしまつた方がよい、そして家は早く弟に讓る事にして置かぬと次第に家財も失はれて、後にはとり返しのつかぬ樣なことになるといふのであつた、そうして此事を決議して親族は一同父へ迫つた、所が、父はなか〳〵承知せぬ、「たとひ如何なる子息にせよ、長男と生れた以上は、後を繼がすのが當然である、よし今放蕩をして居ても、夫がいつ迄も止まぬといふ譯でもあるまいから、まあ當分そのまゝにして置いてくれ」と賴んだのである、けれど、もう親族の者は、自分にほと〳〵愛想が盡きてゐるので「お前さんは親の慾目で、そんな事を云ふてゐるけれど、とても彼の子は末の見込がないから、今の内に思切つて

勘當した方がよい、皆の者がそう云つてゐるのだから、お父さん一人で、そんなに反抗せずにまあ一旦禁治産をして、それで直つたら又もとの通りに入れてもよいではないか」といふ、けれど父はどうしても承知しない「きつと己があれの放蕩をやめさして見せる、あの子は決して放蕩をしてゐても、自分の良心を失ふやうな子ではない、先づこの事は私に任せてくれと」とたのんだ、そこで親族の者も、「それ程、お前さんが云ふなら、任せもしやうが、後で悔ゆる樣な事があつても其時は知りませぬぞ」と云ふて歸つた、所が、自分の放蕩は依然として改めなかつた、其後益々酒色に耽つてゐた、所が、親族は再び父に迫つて、「それ見たことか、あれ程先に云ふたに、お前さんはあれでもまだ、彼の子を家から出す氣はないのか、あれの良心が腐つてゐるのがまだ分らぬのか」といふ。

斯うなつては、もう父は返答に困つてしまひ、何ともいふことが出來なかつたそれでもまだ家から出すとは言はなかつた、そして或る朝、自分の遊んでゐる料

理屋に尋ねて來て、是非自分一人に遇はしてくれと賴んだ、自分は其家の或る六疊の室に一人坐つて、何事かと思つてゐると、突然、父がふすまをあけて這入つて來て、そして自分の顏を見るなり、涙をハラ〳〵と流して泣いた、自分は何事が出來たかと驚いた、すると、父は何もいはずに、兩手を自分の前について、「どうか己を助けると思つて、心を入れ變へて呉れ」との一言、血を絞るやうな聲で云つた、けれども、其時には自分の心に何の感じも起らなかつた、そしてさんざん親を目の前に泣かせてゐながら、其後矢張放蕩を止めることが出來なかつた。

けれど、後にこの事に氣がついて見ると、實に其時の親の胸中は、どれ程苦しかつたであらうかと、思ひ出すさへ涙の種である、親族に顏を會はされず子の放蕩は改まらず、生きるに生きられず、死ぬに死なれぬ苦しみがあつたことゝ、今始めて親心の悲痛を味ふことが出來たのである、今自分の本家は弟が相續してゐるが、弟よりも誰よりも、眞に片時も親を忘るゝ事の出來ぬのは自分である、

親に心配をかけなんだ子は、親が死んでも、それ程に親を思はないが、不孝に不孝を重ねて來た自分は、片時も親を離れることが出來ぬ、私の親は、たゞ私一人の胸の中に慘しい、慈悲の魂として生きてゐて下さる」といふ懺悔であつた。

七、 私はこの事を聞いて、自分のことをあばかれてゐるやうな氣がした、十劫の昔に、三世の諸佛は、私の淺ましい心をごらんになつて、可愛相とは思ひながら、どうして見ても助かる緣の無い爲に、永不成佛と捨てさせられた、けれども、凡ての人々が捨てゝしまつても、たゞ一人捨てる事の出來ぬのは親樣である、如來は三世十方の諸佛の前に立つて「若不レ生者」と誓はせられた、いかに淺ましい衆生にせよ、造無一善の凡夫にせよ、必ず我が名號、南無阿彌陀佛を聞かせて、我れを信ぜしめて、若しあれの口から、南無阿彌陀佛を稱へる身にさせねば、自分も佛にはなるまい、とまで言ひ放たれたのであります。

八、 かくして、私一人を助ける爲には、既に如來は十劫の昔に佛となり給ふたのである、凡ての衆生が、「若し佛に成らずば、我も正覺を取らず」と誓つた親が、既に正覺を取つて、佛に成り給ひし所に、誠に盡きぬ親心が、あらはれてをるではないか。

矛盾の大悲

佛にならねば衆生を救ふことは出來ぬ、然るに如來は、「衆生往生せずば我も佛にならず」といふ、何といふ矛盾したる本願であらうか、私はこの矛盾した本願の中に堪へられぬ親の悲しみがひそんでをることに涙せずにはゐられない。

九、 如來の御苦勞は、五劫の思惟と永劫の修行とのみで、既にすんでしまつてゐるのではないのだ、佛が十劫の昔に正覺成就し給ふてより以來の御親の心配、その苦惱は、猶一しほ身を切らるゝやうな歎きであらう、五劫永劫の思惟と修行とによつて成就せられた本願と正覺とが、私一人の爲に全く根底から其の意義を失つてゐるではないか、佛は十劫の昔に成佛しながら、私は相變らず、本願に背き、大悲を見捨てゝ、生死の迷を續けてをる、凡ての衆生を佛にせずば我も佛に

諸佛に言ひ譯が出來ぬ

ならぬと誓つた如來は、今更三世諸佛にどうして言譯が出來やうか、それ故、如來は、どうあつても、こうあつても、血を流しても、身を碎いても、私一人を佛に成し遂げて下さらねばならぬのである、それを名號、南無阿彌陀佛の六字のすがたに現はして、「南無阿彌陀佛は、汝の親である」どうか己の心にうちとけてくれ、早く私の所へ來い、こんなに思つてゐるのに、どうして己の心が分らぬかと、あせりいらだち給ふ聲が、南無阿彌陀佛の御聲である。

一〇、息子の顏を見るなり泣き出して、何ともいはずに「どうか、己を助けると思ふて、心を改めて呉れ」といふた親の言は、何といふ慘ましい言葉であらうか、私達は、このみじめな涙の親を、目の前に据えて、もしそのまごころが少しでも我胸に届いたら、何とも角とも申樣のない心地を覺へる筈である、有難いといふのも添いといふのもまだ淺い、ほんとうに親の涙が子の胸に徹した其時はたゞもう親は子の名を呼び、子は親の名を呼び合つて、たゞ共に涙に咽ぶのみで

ある、こゝに十劫以來の本願も正覺もはじめて眞實の成就を見るのであります。

第九講　南無阿彌陀佛

至心信樂願爲因　　至心信樂の願を因となす。

一、「本願名號正定業、至心信樂願爲因、成等覺證大涅槃、必至滅度願成就」この一節は、親鸞聖人の宗敎の眼目であつて、第一講に於て述べたる、敎、行、信、證、の中心點であるから、最も愼重に味はねばならぬのであります、卽ち、大無量壽經の「敎」に基き、本願名號正定業とは他力の「行」を示し、至心信樂願爲因とは他力の「信」を示し、成等覺證大涅槃、必至滅度願成就とは他力の「證」を示されたものである。

二、私達には智慧もなく、能力もなく、至誠もない、あるものは、たゞ貪慾瞋恚愚痴の三毒の煩惱ばかりである、それ故、我と我力で修行し、我と我まことで信心をおこして、自力の修行と、自力の信心とによつては到底證果を得ることは出來ぬ、如來は、深くこれを憐ませられて、法藏菩薩のときに、私達のなすべき「行」も、「信」も、佛自ら造りあげて、之を與へて「證」果に至らしめんと誓はせられたのである、前講でしば〳〵述べたやうに、如來因位の本願は四十八種の大願であるが、行は第十七願に、信は第十八願に、證は第十一願に誓はせられた、この行、信、證を悉く仕上げて、一名號南無阿彌陀佛の中に封じ込めて、私達にめぐんで下さるのである、私達はたゞこの名號をいたゞくことによつて救濟られるのであります、この趣を示されたのが、正信偈のこの四句の偈であります。

三、「本願の名號」とは、如來因位の第十七願の誓ひに報いて出來た名號といふことである、卽ち

設し我、佛たるを得んに、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して、我名を稱せずば正覺を取らじ。（大無量壽經）

これを分りやすくいへば、「若しわれ、佛となつたとき、十方世界の無量の諸佛が、悉く我が南無阿彌陀佛の六字の御名を、ほめたゝへて、衆生に聞かしむることが出來なかつたならば、正覺を取るまじ」とのおこゝろであります、卽ち、この願は、法藏菩薩が、南無阿彌陀佛の六字名號一つを以て、一切衆生を助けんと誓ひたまひ、それを十方無量の佛達にほめたゝへてもらひ度いと、お願ひになつたのである、そして、この誓願空しからず、一切諸佛が、これを讃嘆せられたのであります、これを『大無量壽經』に

「皆共に、無量壽佛の威神功德の不可思議なるを讃嘆したまふ」

と說かれてあります、それゆゑ、親鸞聖人は「行卷」の初めに

「大行といふは、すなはち無碍光如來の名を稱するなり」

と述べられました。

これ全く、われら衆生をして、この讃嘆の聲を聞かせて、永劫の疑ひを晴らさしめんとせらるゝおぼしめしであります。

正定業

四、そこで、私達は、この名號を頂くばかりで、「正定業」の身になるのである、正定業とは、正しく定まる業、といふことである、即ち、私達が淨土に生れることに正しく定まることである、業とは結果を引起す原因になるはたらきといふ意味で、私達のいたゞいた南無阿彌陀佛が、淨土に生れるたねになるのだと仰せらるゝのであります、聖人は、一多證文に

「報土の業因とさだまるを、正定の業となづく」

としるされてあります。

名號の體

五、いま、南無阿彌陀佛の名號を、體、相、用の三方面から窺ふてみますと、先づ名號の體とは、眞如法性即ち宇宙の眞理であります、聖人は、これを行卷に

「眞如一實の功德寶海なり」と云つてゐられます、眞如とは即ち佛性である、佛性なれば、成佛するのが道理である、もとより、出離の緣のない私達に、佛性のあらう筈はない、久遠の昔から、常に沒し常に流轉して、六道の曠野を迷ふてきた凡夫であります、それを、久遠の彌陀が憫み給ひて、生佛不二自他平等の佛性を證り、眞如法性の全體を修顯して南無阿彌陀佛と成り給ひ、これを發願廻向と私達に與へて下さるのである、そこで、私達は、更に法性眞如の佛性を覺らねばならぬといふ造作もいらず、聞信の一念に、名號六字が私のものとなつて成佛させて頂くのであります、されば、名號の體は、阿彌陀樣の修し顯はされた眞理、即ち佛性が體となつてをるのであります、本願の名號は正定の業であります。

名號の相

六、次に、名號の相といふは、三つのいはれが具はつてあります、即ち、「歸命」と「發願廻向」と「即是其行」とであります。

支那の善導大師は、「南無」の二字の中に、歸命と發願廻向との二義あることを、

發願廻向と阿彌陀佛卽是其行とを相望して、願行具足の南無阿彌陀佛と仰せられました。

無善造惡のわれら衆生が、彌陀に歸命する一念のところに、阿彌陀佛の成じ給へる五劫思惟の本「願」と、兆載永劫の修「行」の願行が、まる〳〵我ものとなつて、願ぜざる願人となり、行ぜざる行人となつて、やすく淨土に往生させて頂くことを示してくださつたのであります。

蓮如上人は、南無の「たのむ機」と、阿彌陀佛の「たすけ給ふ法」とを相望して、機法一體の南無阿彌陀佛と仰せられました、そして發願廻向は、阿彌陀佛に於ける光明攝取と功德廻施のはたらきであると示されたのであります、卽ち、南無の二字は衆生が彌陀をたのむ機であつて、阿彌陀佛の四字は、彌陀が衆生を助け給ふ法である、それが本來一體にできてをるのであると仰せられました、法霖師は「たのむ機と助くる法が唯一つ、機法一體彌陀の尊號」と歌つてゐられます、

卽ち、南無のたのむ機のまゝが、阿彌陀佛のたすけ給ふ法の外はない、阿彌陀佛のたすけ給ふ法のまゝが、南無とたのむ機の外はないのであります、卽ち、われらが彌陀をたのむこの機は如來より廻し向けられてをつた機であります。

そこで、われら衆生の機の上に起る、如來を慕ひ、如來を憶ふ、信心のありだけを、南無の二字に成就して之を我等に與へて下され、而して助けるわけも阿彌陀佛の四字に成就して、すべてわれらをはたらかせずに無條件のもとに救濟し給ふが、機法一體の南無阿彌陀佛であると仰せられました。

親鸞聖人は「行卷」に「歸命」の歸の字にも、命の字にも、字訓を施して、「是を以て、歸命とは本願招喚の勅命なり」と、如來の勅命に約し、次に「發願廻向」といふは、「如來すでに發願して、衆生の行を廻施したまふ心なり」といひ、又「卽是其行」といふは「選擇本願是なり」とあつて、歸命も發願廻向も卽是其行も共に如來のお手元の上に味はれてゐるのであります。

聖人の行卷は、正しく、南無阿彌陀佛が、われら衆生の信仰の對象であることを彰し、而して、其南無阿彌陀佛の意義に就ては、全然、他力廻向のくだされものたることを示されたのであります。

即ち、「歸命」を招喚のおよび聲とせられたのは、くだされものの「相」であり、「發願廻向」は、くだされものの「心」であつて、「即是其行」はくだされた「行」であります、つまり、廻向せられたものも、廻向してくださることも、ともに南無阿彌陀佛の六字の中に在つて、他力不思議のはたらきを顯はして、われらを救ひ給ふ道理を明らかにせられたのであります。

七、次に、南無阿彌陀佛の「用」即ち、力用といふは、前に述べた如く、名號六字は、眞如法性、願行具足、機法一體の南無阿彌陀佛でありますから、私達がその名號を聞いて信ずる一念に、全部私のものにいたゞくことができるのであります、いたゞいてみれば、現在では正定聚（成等覺）の分人になり、將來に於ては

涅槃寂靜にして、光明無量、壽命無量の如來の證果をひらかせてもらふのであります。

八、要するに、久遠劫來迷ひ來れる愚痴無智の私達を、見るに見かねて、五劫思惟の本願となり、法藏菩薩の修行となつて、さうして、光明をもつて私達自己の罪惡に目醒めしめ、自己の眞相が一歩〳〵知られだして、私達の心の底から、本當に救はれねばおれぬ心を、名號によつて起さしめて、これは全く阿彌陀佛よりの御はたらきでましましたかと、信ずる一念に、南無阿彌陀佛が、正しくわれらの成佛することの定まる業となり、私達を眞實に生かして下さる大生命となり我が心の主となりて、やがて「涅槃」の證果をひらかせて頂くのであります。

九、かくの如く、私達が、この南無阿彌陀佛によつて救はれ、南無阿彌陀佛によつて、往生成佛させて頂くといふ、信心の起つたわけは、私達が一生懸命になつて出來た心ではなく、又聽聞の力でもない、之も全然、たゞ救ひたいばつかり

至心信樂願爲因

の、如來の願ひの顯れからである、卽ち、如來の、「至心信樂の願」が因となつて信心がおこつたのである、至心信樂の願とは、第十八願のことである。

「設し、我、佛たるを得んに、十方の衆生、至心に信樂して、我國に生まれんと欲して、乃至十念せん、若し、生れずば正覺を取らじ。」(大無量壽經)

もし、我、佛となりたらん時、十方世界の衆生、我が與ふるところの、至心信樂欲生の、他力の信心を得て、念佛を稱へるものが、我が眞實報土へ往生できぬといふことならば、我は正覺はひらくまい、といふ誓願であります。

よつて、我等の信心は、決して、凡夫の發起にあらず、如來本願の御心より發起せしめ給ふものである、故に、親鸞聖人は、和讃に「若不生者の誓故、信樂誠にときいたり」とも「信は願より生ずれば」とも仰せられた。

信は願より

一〇、かゝる、如來の大願業力によつて出來た信心であるから、この罪深き私を、自然に淨土へ引き入れ給ふ御德がこの信心の中に滿入してをるのである、これによつて、信心が往生の正因となるのであります。

こゝに於て、御親は永劫の苦惱より遁れ給ひ、私もまた無始の迷より醒めることが出來るのである、親は子によつて始めて生き、子は亦親に遇つてはじめて其愛によみがへる、信の一念は正しく、この親子抱擁の時刻を指して言つたのであります、親子相共に救はれて、胸一ぱいの涙にかきくるゝすがたこそ、本願の名號は正定業であります。

一一、世間には、この南無阿彌陀佛の廻向の力に觸れずして、このまゝながら救はれると說く者がある、これは全く外道である、自分の信の眼が開けずして、どうしてこのまゝ乍らで救はれやう。

たのみ所
まかせ所

一二、また、阿彌陀佛とさへ云へば、いつでも極樂や佛檀の中ばかりにゐらるゝものと考へて、娑婆のこゝから、いかにしてたのむべきか、いかにして任すべきか、いかにして疑ひをはらさうか、と骨折るものがあるが、私は屢々前に述べ

た如く佛を極樂の遠方に置いたり、佛檀の中に道具にしてをる間は、斷じて如來はたのまれない、任されない、疑ひははれないのであります、それは、たのみ所、任せ所、疑ひのはれ場所に、方角違ひをしてをるからである、生涯西に向ふてたのんでをつても、いつまでたつても極樂から、御返事は聞えないのである、況んや後生ほどの一大事、我が大切ないのちを、そんな遠方の御方にどうしてうつかり任されやう、それでは何をたのみ、何に任せ、何に疑ひをはらすのか、申す迄もなく、名號であります、南無阿彌陀佛をたのみ、南無阿彌陀佛に任せ、南無阿彌陀佛に疑ひをはらすのであります、この名號をはなれて生身の佛體に向ふて往生を決定することは決して出來ない相談である、もし、そんなことが出來たなれば、第十七願の面目は丸つぶれになつてしまふではないか、如來の御約束を反古にすることとなる、よつて、南無阿彌陀佛こそ、私の後生を引受けて下さる佛體なり、本尊なり、行なり、信なりであります。（拙著、信仰坐談、本尊論を參照を乞ふ）

佛像の禮拜

一三、私達が、佛檀の佛像を拜むのは、決して偶像を拜むのではない、木を拜むのではない、紙を拜むのではない、あの御木像、御繪像を助緣として、佛の御心を拜むのである、卽ち南無阿彌陀佛を拜むのである、『觀無量壽經』の仰せの如く、

佛心を拜む

「佛身をみるものは、佛心をみたてまつる、佛心とは大慈悲是也」

と、ある如く、佛像のお姿の上に、佛のお心を拜むのである、卽ち、南無阿彌陀佛の名號の御心を、形に顯はし、姿に見せて、私に拜ませて下さるのである、然るに、お寺へも參詣する、御內佛へも參詣する、お念佛も稱へる、けれども、すこしも罪を恥づる思ひもなく、善を勵む心もない誤信者が多い、これは、木像や繪像に執着して、徒らに偶像に媚びる輩である、どうして佛の御心に叶ふものといはれやう、これを、ほとけいぢりといふのである、目先手先で拜んで、口先でお念佛唱へるだけでは何のやくにもたゝない、心の底に如來の御親切を深く味ふ

ほとけいぢり

身にならねばならぬのである、アノ尊い、お立すがたを拜しては、いつ迄も私達が、迷ひに沈んでをるもの故、如來はぢつとしてはいられずして、座を立つて喚びかけ給ふお相である、後光を拜しては盡十方の智慧を思ひ、擧げ給ふ右の御手は、私を招き給ふ招喚の聲と拜み、下げ給ひたる左の御手は、私を救ひ上げ給ふ御相と拜む、私達はいつも、この木像繪に對する毎に、眞の御佛の御心を思ふて喜んでこそ眞の禮拜のうれしさがあるのである、こゝに至りて蓮如上人の「本尊はかけやぶれ、聖教はよみやぶれ」のお諭しが身に染んでうれしくなる。

一四、 再び云ふ、お淨土の眞中にぢつと構こんでゐて、さあこい、來たら助けてやらうといふやうな、そんな生温いお慈悲の如來なら、こちらから御免を蒙る、この世の親にも劣るでないか、われらのみ親はこゝまで御座れ甘酒進上の親ではない、また悔ひ改めよ、さらば救はんといふやうな、バタ臭い手間のかゝる御救ひでもないのだ、汝、我心を知れ、これ程に思ふ心を、これ程に念じてをる心を、

香樹院師と禮拜

これ程に切ない我が心を——南無阿彌陀佛を——これをすがたに顯はして立ちづめの御本尊樣であります、こゝにいたつて、御木像も、御繪像も、御名號も、一つになつて、有難い如來の御心の顯はれであることが喜ばれるのであります。

一五、 香樹院師は「つく〳〵と、如來樣の御姿を拜みあげて、頂上の肉髻より千輻輪相、御目、御唇、御胸と、つく〳〵拜むと、あなたの御目に涙がうかぶ、あなたの御胸が八つ裂になるやうに、思召すであらうと拜み上ぐれば、ありがたうなる」と、云つてゐられる。

北國の信者

一六、 北國の或信者は、乞食が一時間でも、我門口に立つてをれば、「お前は何の爲に、そこに立つてゐるぞ」と、問ひ正すに違ひないのに、私は、數十年間、お佛檀の中に、お立ちづめの親樣を拜みながら、「なぜ、あなたは、お立ちなされてござるかと、お問ひ申すことをせなかつた、何とした勿體ない事であらうか」と、云つて、泣いて慚愧をしたそうである、まことに有難い懺悔です、私達は、

拜むばかりが能でない、親様に、問ふてみることが必要だ、「大悲の親様――、あなたは、なぜ、そのやうに、お立ちづめに、立つてゐられますか」と問ふてみることだ、佛は、いつでも、御答へして下さるであらう、「たゞ〳〵、俺の心（南無阿彌陀佛）を、貴様に知らせて、助けてやりたいばつかりだ」と、お答へ下さるにちがひない、私達は、いつも坐つて禮をしてゐる、如來は、いつも立つて、私達を呼んで下さる、勿體ないことだ、私達は、はやく如來のお呼び聲を、南無阿彌陀佛の御名號のうへに、うけたまはらねばなりませぬ。

第十講　現當二世の利益

成等覺證大涅槃
必至滅度願成就

等覺をなり大涅槃を證すことは、必至滅度の願成就し給へばなり。

成等覺證大涅槃

一、如來のお救ひは、單なる一時的のお救ひではなく、未來永遠に佛のさとりにまで入らしめたまふお救ひである、それゆゑ、一たび如來の光明の緣によつて、名號のいはれを信じたものは、たゞちにこの世では、「等正覺」といふ正定聚の菩薩の位に入り、來世には必ず安樂の淨土に於て、「大涅槃」のさとりをひらくのであります、大涅槃とは梵語であつて、滅度と譯す、滅度とは、迷ひの苦みを滅して、罪の流れを渡り終つた境界といふ意味で、佛のさとりをいふのであります。

二、かくの如く、吾等人間が、現在から等覺の菩薩の位に入り、來世には、大涅槃の佛の證りに入ることを得るのは、これは決して我力ではなく、如來が、四十八願中の第十一願目にお誓ひくだされた結果である、それは、

「設し我、佛たることを得んに、國中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずんば正覺を取らじ」（大無量壽經）

若し我、佛となつたならば、この國のなかの人天が、正定聚の位に入り、未來

必至滅度願成就

は必らず大涅槃の佛果を得ぬやうなことでは、我は正覺を取るまじと誓はれたのであります、この願意によつて、本偈に「等覺を成り、大涅槃を證することは必至滅度の願成就したまへばなり」と仰せられたのである。

三、親鸞聖人は、銘文に、この御文を釋して、

「成等覺證大涅槃といふは、成等覺といふは正定聚の位なり、此位を龍樹菩薩は卽時入必定とのたまへり、曇鸞和尙は、入正定聚之數と數へたまへり、これ卽ち彌勒の位に等しとなり」

彌勒菩薩

と、仰せられてあります、よつて、等覺も、正定聚も、不退轉も、歡喜地も、入必定も、みな、信心を得たものゝ、現在に於ける位であります、彌勒菩薩とは、現在兜率天に在て、菩薩の階級の五十一段目にゐらるゝ方である、釋尊入滅より、五十六億七千萬年の後に、この世に生れて、龍華樹下に於て、正覺をひらき、此時に於て、前佛釋迦の說法に洩れたる衆生を濟度せらるゝみ佛である、然るに、

必至滅度と必墮無間

われらは順次の往生と申して、今にも露の命の終るなり、安樂淨土に生れて、大涅槃をさとり、彌陀同體の身にして頂くのであります、聖人は、和讃に「五十六億七千萬、彌勒菩薩は年を經ん、まことの信心得るひとは、このたび證をひらくべし」と讃嘆せられました、ちやうど、最大特別急行列車が、先發の普通列車を小驛に待たせておいて、汽笛一聲、お先へごめんと、お淨土へ先着するやうなものである、全く願力他力のおかげであります。

四、或る先輩は、「必至滅度」の信仰は、常に「必墮無間」の信仰と共に成立するものであると云はれたことがある、本當にそうだと思ふ、たゞ「墮ちるものをお助け」といふのは、それは佛法の口まねをやつてをるのである、墮ちるのは「必ず」墮ちるのである、「必ず」墮ちるやつ故、「必ず」救ふて下さるのだと味へば、生きた感じが湧いてくる、それは人間まで墮ちるのではない「無間地獄」へまで墮ちるのである、また救はるゝのも天國までの救ひではなく「大涅槃」の極樂淨

土まで救はれてゆくのである、しかも之は豫想ではない、「必ず」を拔いたらすべてが豫想となつてしまふ、信仰は豫想ではない「必ず」である、一蓮院師も、「必」とは、まちがはぬことである、我等は、地獄は必定すみかである、これを「必墮無間」といふ、必ず墮つるのである、然るに、信の一念にその「必」をつけかへて、必ずたすけ給ふのである、四十八願の「必至滅度」を思ひ合はせてみよ、和讃に「のせて必ずわたしける」、御文章に「我を一心にたのまん衆生をば必ずたすけ給ふべし」とのたまふ、と申されてあります。

五、 先年、或る氣の毒な人に遇ふた、それは、三四十年も說敎を聞いた老婆が、病氣になつて醫者から、「もう二ヶ月の命ぢや」と云はれて、「さて後生は」と考へてみた所が、どうも先が薄闇くて仕樣がない「どうしたらよいか」と云ふてをる、私が遇ふて聞いてみると「今更仕樣がないから、佛さまにかぢりついて居ります」けれど、もし一足ふみはづしたら何うせうかと思はれて、どうも安心ができませぬ」といふ、「なるほど、かぢりついて居れば、そうなるのは當然だ、お婆さん、もし一足ふみはづしたら、と云はれるが、何處へ足をかけて、ふんばつてゐらるゝのか、智者や聖者のやうに、善根や功德を持つてゐて、それに足をかけて、落ちてはならぬときばるのなればともかく、あなたはそんな立派なお方では無い筈です、今から仕そこなうて、今から火の車に乘るのではない、一足や片足ではない、疾くに兩足をふみはづして「地獄は一定」と、いま逆さまに、穴へ落ち込んで往きよる身ぢやないか、只今が火の車に乘せられて、もう二度と逆戻りのできぬ暗い旅路へ引きづられてゆきよるのではないか、「助かる手がかりがない」とは此の事です、ふんばらずに落ちなさい、あなたが佛樣の御袖にぶらんこするのではない、佛樣が落ちてゆく奴にかぢりついて下さるのが南無阿彌陀佛のお助けです、火の車に乘らぬやうにして「我に來れ」と仰せらるゝのではない、地獄の穴へ落ちぬ先に、我が手にかぢりつけよと喚んでゐらるゝのでない、火の車に乘つ

一足ふみはづしたら

てをるまゝを救ふぞ、落ち込んで往きよるまゝを南無阿彌陀佛でうけとめて助けるぞのお慈悲です、それを見當ちがへて、我手で仕事が出來るやうに思ふてはならぬ、落ちるまゝで念佛しなさい、火の車の中で念佛するのです」と云ふてきかせたことがある。

六、私はつく〳〵思つた、火の車を餘所事に思ふたり、向ふの方に眺めたりしてゐては、どうしても「どうかならねばならぬ、落ちてはならぬ」といふ、ふんばる心が出て來るのである、我等は現在火の車に乘つて居る身である、「必ず」無間地獄に墮つる身だと氣付かせてもらつた時に、「必ず救ふ」の信心が味はれ出すのであります。

第十一講　釋尊出世の本意

如來所以興出世
唯說彌陀本願海

如來世に興出したまふ所以は、
唯彌陀の本願海を說かんとなり。

一、これまでは、阿彌陀如來の因位より、衆生救濟の證果までを、述べさせられたから、これよりは、これを敎へて下された釋尊の思召を傳へてくださるのである、そこで先づ、釋迦如來の、この世にお出ましなされた本懷を讃仰せらるゝのが本節であります。

如來所以興出世

いま、正信偈に「如來」とあるは、總じていへば諸佛に通ずるのであるが、いまこゝでは釋迦如來のことをいふのであります。

釋尊の出世

二、釋尊は、今から凡そ三千年程已前の四月八日、印度の迦毗羅城主淨飯王の

皇太子としてこの世にお生れになりました、御母君の摩耶夫人は、釋尊がお生れになると間もなくお亡くなりになり、釋尊は御父君の御寵愛はもとより、澤山の近臣にかしづかれて、何不足なく榮耀榮華のうちに御成人なされ拘利城の長者善覺の女耶輸陀羅姫を迎へられて、一子羅睺羅を設けられたのである。

三、或時、釋尊が近臣を從へさせられ、城外へ御散歩になつた時、まのあたり老人や病人死人の苦しめるありさまを御覽になつて、深くお心を痛めさせられ、直ちに御散歩をお止めになつて深き思ひに沈ませられたのである、釋尊は、この世界は、何故に斯くも苦でみちて居るのであらうか、また如何にしてこの苦惱を脱るゝことが出來るであらうかを考へさせられたのである、そうして遂に、父と國と王位と妻子をも捨てゝ、一夜、ひそかに宮城を脱け出られ、一介の乞食僧となつて修行の旅路に上らせられたのである、それは御年二十九歳(又は十九歳)の時であつた。

四、それより釋尊は、諸國を巡つて、當時の名高い跋伽、阿藍、伽藍等の哲學者又は仙人等を訪ねられ、終にヒマラヤ山を深くわけいり、ウルビラの靜かなる森の中で、六ヶ年(二年又は十)間身も心も、苦しむが上に苦しまれたのである、六年の苦行中は寂しき林の中にたゞ一人、日に燒かれ、寒さに凍え、雨の時も風の日も、一日一食をとつて唯默然として端身靜坐せられたのである、手足は恰も葦のやうに痩せ衰え、背骨は網のやうになり、眸は落ち込んで、深い井戸に宿つた星のやうに輝いてゐたと傳へられてあります、この靜觀の間にも、恩愛の惡魔は、色々のかたちを顯して、釋尊の御心をみだそうとしたのであつたが、釋尊は、これらの煩惱にすこしも動きたまふことなく、恰も、大山王の如く、强く精進せられたのであつた、かくて遂に、御年三十五歳の十二月八日、尼蓮禪河の畔、菩提樹の下に於て、曉の明星の輝く頃、廓然として『無上正覺』、卽ち釋尊の御胸のうちに『覺』を得られたのでありました。

覺りの内容

五、それより釋尊は、その「正覺」の内容、悟りの御心持を、如何にして表現し、如何にして人に說き聞かせやうかといふことに、大に苦しまれたやうである、即ち釋尊は自分ひとりの「悟り」にのみ滿足してゐられないで、萬人に、その敎えを聞かせたい大慈悲に燃え給ひ、八十歲の涅槃の雲にお蔭れになる迄、御說法を續けられたのである、茲に於て釋尊御一人の「お悟り」が、世界人類凡ての者の光明となりて、こゝに自利利他圓滿具足の佛陀敎が存在することになつたのである、そこで釋尊の「正覺」の内容、即ち悟りの御こゝろもちは果して如何なるものであらうか、その本意を窺ふのが本章のかなめであります。

釋尊の御容貌

六、釋尊は、偉大なる體格と、また非常に優れたる御容貌をそなへられたお方であつたらしい、すべての人は其の御面容に接したのみで、おのづからたゞ人ならざる人格に打たれた程であつたと傳へられてあります、お經の中には、釋尊の容貌を讃へて「巍々として寶山の聳ゆるが如し」などゝ說かれてあつて、兎に角、ひとめお顏を拜見した丈けで、まゐつてしまふ、といふ程の立派な容貌を具へてゐられたのである。

佛敎美術の中心

七、この御容貌が既に釋尊の人格が表現されて居るのであつて、後世そこから佛像が生れ、佛敎美術の發展が萠してをるのである、思ふに、佛敎美術の中心となる佛像は、悉く釋尊の人格を具體化したものであつて、今日、我々佛敎徒の拜んで居る佛像は、すべて釋尊の人格の上に現れてをる「悟り」の具體的表象を拜んでゐるのであります、この點になると、彼のキリスト敎徒が、血に染む十字架上につるされたるキリストを拜するのとは、餘程趣を異にしてをると思ひます、佛敎はどこ〳〵までも完成されたる人格を仰ぐ宗敎であります。

八、かくもすぐれた御容貌をせられた釋尊が、或時ギシャクッ山に於て御說法の際、一日、前後に比類なき、心にも身にも溢れる樣な歡ばしい御相好をせられたことがあつた、そこで朝夕お側に在つてお仕へをしてをる阿難尊者が、非常に

不思議な感を起し「世尊よ、今日は一體、どう遊ばしたのでムいますか、今日程世尊の御すがたの勝れて透きとほるやうな御様子を、お見受けしたことがありませぬ、唯いま世尊は、もろ〳〵の佛達と、同じ心境におはいりなされて、そうしてもろ〳〵の佛達が互ひに相念じあひ給ふやうに、今世尊も、きつともろ〳〵の佛達を相念じ給ふてゐらせられるに相違ございますまい、まあなんといふ神々しいおすがたでゐらせられるのでせう――」と、阿難は恭しく釋尊に、お尋ね申したのである、すると釋尊は「阿難よ、善いことをいふではないか、それは一體、お前が氣付いてたづねるのか、それともまた天人でも來つて、お前に敎へたのでそんなことを問ふのであるか」、「いえ〳〵決してそんなことはムいません、私は、私の目で見、心に浮んだことを申上げて、お尋ね致しましたに相違ありません」、「ア、そうであつたか、阿難よ、お前の問は本當に私の心に適ふてをる、よくたづねてくれました、恐らくお前は、多くの群生を思ふ一心から、深い智恵によつて、

釋尊出世の本意

私の心のうちを問ふてくれるのであらう」と、いかにも御滿足の態で、釋尊は、次の言葉を宣言せられました。

九、「阿難よ、私がこの世に生れ出た本意をこれから說くであらう」、「阿難よ、私がこの世に出興する所以は、たゞ、本佛、阿彌陀佛の本願を、說き弘め、あらゆる生きとし生けるものをすくひ、そして彼等にまことの利益を惠みたいばつかりであつたのだ」と、仰せられました、こゝに始めて釋尊御自身が、この世に生れ出られた本意をあかされたのであります、こゝを經に「如來無蓋の大悲を以て三界を矜哀す、世に出興する所以は、道敎を光闡し群萌を拯ひ、惠むに眞實の利を以てせん」としるされてある、それより釋尊は、阿難及びその座にあつた弟子達の爲に、阿彌陀佛の本願――眞實の利、卽ち南無阿彌陀佛の名號の謂れを諄々と說かれたのが『大無量壽經』上下二卷であります、この說法を聞いた凡ての大衆は、ことごとく、生死の苦惱を脫れ、阿彌陀如來の本願に救はれていつたので

ある、茲に於て釋尊も大に滿足され、又すべても滿足せしめらるゝことが出來たのであります、こゝを親鸞聖人は、今正信偈に「如來(釋迦)、世に興出し給ふ所以は、唯彌陀の本願海を說かんとなり」と示され、和讃には「如來の光瑞希有にして、阿難甚だ快よく、如是之義と問えりしに、出世の本意顯はせり」と歌ふてゐられます。

唯說彌陀本願海

正覺の道程

一〇、この『大無量壽經』の宣言によつて、いよ〳〵釋尊の「正覺」の內容、「悟」の御こゝろもちを明らかに窺ふことが出來るのであります、前にも申した如く、釋尊は、人間の苦惱を脫れん爲に出家されて、あらゆる難行苦行を嘗められましたが、人間の苦しみは、人間の力を以てしては、如何ともし難いことであります、といつて人間以外に、神や佛の偶像を作つて、その力に依つて、救ひを求められやうとしても、之も亦一種の迷妄に過ぎなかつたのである、そこで釋尊は、悲痛な心を抱いて山を下られ、水淸き尼蓮禪河に入りて沐浴し、牧童の捧げる牛乳を飲んで、心身の精氣を回復し、菩提樹の下に端座して、靜かに〳〵內省の道に入つて、自分の心の裡を、自分でぢいつと御覽になつたのであります。

一一、かくて、其翌曉にいたりて、廓然として、釋尊の御胸のうちに、明晃々〳〵たる輝きが、赫き渡つたのである、卽ち、自分を救ふものは、自分の外側にあるのではない、自分の裡、心の奧底に、流れてやまぬ、我ならざる我——大我——無我——久遠の生命——（それは限り無い、いにしへ阿彌陀如來が正覺を取り給ひし其時より、私共に惠まん爲に具へられたる生命）宇宙——の中心生命——救濟意思——（我を絕へず、眞實に生かそう〳〵とせる本願力）——眞實の利——絕對智——絕對愛——（南無阿彌陀佛）——此大きな力に觸れられたのが、釋尊の「自覺」の內容であります、而してこの——久遠の生命——南無阿彌陀佛——彌陀の本願——が釋尊一代の八萬四千の法門となつて現れ、御齡、八十歲に至るまで、歡びに滿ちて、諄々として御說法をつゞけられたのであります。

一二、ところが、茲に一つの問題がある、それは法華經の方便品に「一大事因緣の爲に世に出現す」とか、また「四十餘年未顯眞實」などゝ云ふお言葉があつて、こゝにもまた釋尊一代の眞實、圓融至極の敎として仰せられてあるのであります、してみれば、法華經も釋迦出世の本懷を顯はすものと云はなければならぬことになる、且つ大無量壽經は釋尊の四十餘年前に說かれたものであるから方便敎であらう、大體、天に二つの日なく、地に二王なきが如く、釋尊の本懷に二つも三つもあるべきものでないから、法華經が本懷の敎であつて、大無量壽經の敎は本懷の敎であるまいと云ふ難題であります。

一三、併しこれは、どちらも本懷であるといふことが出來る、難行自力の敎の中では法華經が本懷であらうし、易行他力の敎から云へば、彌陀眞實の大無量壽經が本懷と云はねばならぬ、一方は東の大關、一方は西の大關である、若し敎の高遠な邊から云へば、法華經が本懷とも云へるが、普く利鈍の衆生を救ふといふ

邊からいふ時は大經が本懷でなくてはならぬ。

喩へば此處に一人の醫者があつて、丈夫な者に飲ます强壯劑と、大病人に飲ます妙藥とを以て病院に來たとする、醫者にとつてはどちらも大事な藥であらう、併し、この大事な二品の中でも、どちらが大事かと押して尋ねたら、申す迄もなく、大病人に飲ます方が大事であるといふに違ひない、それは醫者の役目は、病人を治すのが第一の仕事でなくてはならぬ、してみれば、醫者の本懷は勿論、大病人めあてゞある、それに、丈夫なものは極めてすくない病院へ出て來たとすれば、病人相手であることは勿論であります。

「佛は大醫王の如し」とも說かれてある如く、菩薩や聖者の上根上智の人は丈夫な人のやうなものである、鈍根無智の衆生は大病人と同じである、此世は善人のすくない惡强き障多き病人の多い世界である、そこへあらゆる者を濟度する役目のある佛が御出になるのは、菩薩や聖者の人に聞かす法華經よりも、下根下劣の

衆生を救ふ大無量壽經が其本懷であることは云ふまでもない、されば大經の敎こそ、出世本懷中の本懷たることは勿論であります。

一四、かくの如く、釋尊出世の御本意は、彌陀法を說かんが爲でありますから、私達が一向に彌陀一佛に歸命することが、釋尊の御本意に契ふことになるのである、仍つて、親鸞聖人の宗敎では、阿彌陀如來一佛を本尊として、別に釋迦如來をまつらずして、彌陀一佛の上に、二尊一致の御すがたとして禮拜するのであります。

第十二講　惡人正機の本願

五濁惡時群生海　五濁惡時の群生海、
應信如來如實言　應に如來如實の言を信ずべし。

一、ほとんど現代は行きつまつてをります、學問に行きつまり、政治に行きつまり、道德に行きつまり、物質にゆきつまり、思想に行きつまり、宗敎に行きつまり、敎育に行きつまり、家庭に行きつまり、人口問題、海外移住問題、勞働問題、小作問題等、すべてに行きつまりである。

その爲に、人心がいつもイラ〳〵して、非常に氣短で、感傷的で、怒りつぽい、まるで子供か老人のやうである、信仰のない老人が年を取るに從つて、年々刻々に死が近づいて、先が行き詰まつてくるから、いらだつてくるのは當然であらうが、現代人の殆んど凡てが短氣である、神經質である、殊に近頃、精神病者の非常に多くなつたことは驚くばかりである、それが二十五歲から五十歲迄の男子に多く、その大概は、失業の問題、事業の失敗、家庭の不和、性慾問題から起つてをるといふことである。

二、殊に、すべての階級に屬する人々に、耻を知るといふ、廉耻心の缺乏も現

代世相の著しい事實であらう、就中、衆人の上に立つ、政治家、教育家、宗教家、著述家、學者等の智識階級者流に、其精神がかけてゐることが明らかである、口には社會だとか、國家だとか、人道とか愛とかの美名に隱れて、人を騙し、賄賂をとり、人妻と姦通する、それを恥ないばかりか、むしろ誇りとして新聞や雜誌に堂々と發表したり、聲明書などを掲げたりする、騙される者が馬鹿で、騙した方が偉い、詐はられた方が愚で、詐はる方が賢いやり方だといふ風になつてきた、近頃頻々とおこる學校ストライキの醜狀を見よ、從つて恐喝、詐欺、窃盗、强盗、傷害、の多いことはおびたゞしい事實である。

三、こんな有樣であるから、人心がだん〳〵と荒むのは當然である、また此頃の殺人の多いことはどうか、一東京市だけに、一ヶ月七八十人の殺人事件があることを統計が示してをる、また神戸の方面には、青年學生の自殺者の多い事に驚く、須磨方面の海岸にある「一寸待て」の立札は、どれほどの効果を奏するものであらうか、水呑往生、鐵道往生、ブランコ、毒藥、ピストル、ほとんど毎日の新聞に見ない日はないのである。

四、かうした行きつまつた現代を救ふ法は、學問でも、思想でも、教育でも、物質でも、既成的迷信の宗教でも到底駄目である、たゞ〳〵、絶對の同情者、涙と力のこもつた、南無阿彌陀佛の一道以外には、救濟される道はないのであります。

南無阿彌陀佛は、すべてに捨てられた、哀にも、淋しき自分、このどうすることも出來ぬ孤獨の自分の、親であり、生命であり、力である、行詰まつた胸底から、「泣くな、お前獨りでない、我と一緒だ」といふ喚聲である、この「如來樣と一しよだ」と、いふ自覺がきらめいた時、そこになんとも云へぬ絶對の力が體感されて、すべて人生の方向がかはつてくるのであります。

五、いまから數年前に、私のところに、Mといふ極めてまじめな青年がをつた

ことがある、以前は臺灣で働いてをつたが、からだが弱い爲に內地へ歸つて、宗教的生活をして佛樣に奉仕したいから、私の傍に置いて呉れと云つて來たのである、其時は二十八歳であつたが、眞劍に如來のお慈悲を喜び、つねに唱名してよくみ佛に仕へてくれたのであつた、ちやうど來館してから四ヶ月目の頃に、急に左の腕に、紫色な斑點が出來て、關節が痛い〳〵と云ひ出した、早速懇意な三の宮のT博士の診察をうけさせた所が、意外にもそれが癩病の前兆であると診斷された、Mは急にがつかりして意氣悄沈して、一週間程、神經衰弱にかゝつて床についた、夫より一年もたゝぬうちに、顏の相好が崩れ出し、右の眼の下と、首のうしろから、すこしづゝ膿血が出はじめた、Mはこんな姿になつては鄕里へは歸られぬといふ、Mの病氣は宅の女中へも秘密にして置かねばならぬ爲に、私が毎日二度づゝ、首の膏藥のはり替へをやらねばならぬことになつた、一日〳〵とたゞれてゆく局部から、何とも云ひ樣のない、くさい〳〵臭氣が發る、館內でも

うす〳〵Mの病氣を知りかけてきて、早く國元へ歸して了へと私に迫る者がある、女中はひまをくれと云つて逃げ出して了ふ、Mは孤獨の悲哀に催されてか、夜中になると暗い室ですゝり泣きをしてをるやうだ、自己の業とは云ひ乍ら、どうして、こんな病にかゝつたのかと思へば愚痴も出る、しかし私の性分として、どうしてこのまゝ國元へ歸されやう、其期間に四人も女中が入れ替はつたが皆歸つてしまふ、其時は、私は獨身の頃であつたから、三度々々うどんばかり喰つて日を過した、私がこんな病氣を看護せねばならぬのも私の業だ、私はそのたゞれた肉を見ていつも合掌した、私のたましひは、まだ〳〵これ以上にたゞれてゐるのだ、人の事ではない、「惡性さらにやめがたし、心は蛇蝎のごとくなり」、「貪瞋邪僞おほきゆへ、奸詐百端身にみてり」と、悲歎述懷せられた親鸞聖人の御心は、全く、この私のたゞれたましひのすがたを指して仰せられたのではないか、このきたない私を、一身に引きうけて、苦しみぬいて下されたのが法藏菩薩である、その

時の法藏の御姿も、こんなに膿血を流してくだされたことだと思ふと、私はMの肉の上に念佛せずにゐられなかつた。

Mの病は、だん〳〵ひどくなるばかりである、しかし、當時の私は貧乏の底ぬけで、毎月會館の借家賃を二百四十圓づゝを支拂ふことにさへ窮してをつた場合であるから、どうしてやることも出來ぬ、たゞ姑息な賣藥や灸ぐらゐで抑へてをるのだから、病氣の快くなる時はない、私はこの時ほど人間の力の及ばぬことをほと〳〵感じたことはなかつた。

六、ところが、或日、西の宮の某家へ、例月の家庭法話に往くと、其御宅の令嬢が、東京の方で結婚せらるゝことになつて、幼い時から貯金して置かれたお金が、「これだけありましたから、これを何かにつかつて下さい」と、思ひがけなきお金がめぐまれたのであつた、私は押し頂き、心の中で小踊りした、アゝこのお金、令嬢のやさしきお心づくし、これでMの命は助けられるのだと思へば、たゞ

〳〵嬉しくて堪まらない、早速、其夜十一時歸館早々Mに其まゝを渡した所、Mは何も云はず、すぐに佛前に其金を捧げて、大聲で泣き〳〵念佛した、Mは、このお金をもつて明朝出發して、讃岐の大島の療養所へ行くと云ひ出した、私も卽座に大賛成、徹底的に專門醫について診察をうけることを勸めた、翌朝四時に、私の古いトランクを持たせて、三の宮驛迄見送つた時、汽車の窓から、みすぼらしい姿をして、手を合はせて拜みながら「死んでも御恩は忘れませぬ、先生、もし、私に信仰がなく、み佛のお救ひが知れなかつたら、もう疾くに、自殺してをつたことゝ思ひます、この世から、すべての人にきらはれたこの業病人を、阿彌陀如來なればこそ、先生なればこそ……」涙は、とめどなく合掌の手の上に流れた、私も、胸が一ぱいになつて一語も云ふことが出來ず、たゞ涙と共に合掌してMを見送つたのであつた。

かゝる業病にかゝりながらも、悲哀も苦痛も忘れて、靜かに大悲の御恩を感謝

して別れて行く、この光景は、宗教無き人生では、到底見られないすがたであらう、Mは夫より二年半の後に、病氣が固まつて退院して、いま國元で父の百姓の手傳ひをして、健げに念佛の生活をつゞけてをります。

五濁惡時群生海

七、そこで今日の如く、時代が濁り（劫濁）、思想がみだれ（見濁）、人心が浮薄に流れ（煩惱濁）、道德がすたれ（衆生濁）、若死にする者の多い（命濁）、この五濁惡時の、苦海にたゞようてをる群生は、ぜひともこの釋迦如來の眞實の道理に契ふた、如實のお言葉である南無阿彌陀佛を信ずる身にならねば、救はれる道はないと、祖聖はお勸め下さるのであります。

應信如來如實言

八、「如來如實の言」とは、釋迦如來の言である、それは、本佛、彌陀の本願に契當して、露ばかりの謬のない敎のことばといふ意味であります。

聖道自力の法は、上智上根の人々のみは助けられやうが、五濁惡世のわれらは、たゞ〳〵彌陀の本願の一法ならでは、救はるゝ道はないから、釋迦如來の仰せ通りに、南無阿彌陀佛の勅命一つを、まうけにして、疑ふ勿れとおすゝめ下さるのであります。

九、釋尊も大經に、「應當信順」と說かれて、南無阿彌陀佛の名號法は、方便でない僞りでない、安心して信じて吳れ、疑ひなくまうけにせよと仰せられてあります。

地獄が怖ろしい

これも先年阪神線に沿ふ或る町の某家へ、例月の講話にいつた時であつた、其お宅の主人が、「過日宅の家內の鄕里から、一人不幸な女を女中として使ふやうにいたしましたが、この女は夫に別れ子供を亡くした所爲か、大變に無常を感じて、自分も今に死んで往くやうに考へましてか、地獄が怖ろしい、先がくらい、と頻りに申して、夜も安らかに眠らない樣子で、あまり可哀相に思ひまして、先日お手次の御院主を賴んで、御法話をして頂きました、そのお話に、兎に角念佛して居るやうに、其うちに信心が得られませうとまうされました所が、本人は、その

信心が得られぬ先に死んだならば、すぐに地獄へ行かねばならぬと、相變らず心配をして居ります、どうか、御迷惑でせうが、心のゆくやうに話して頂き度いのでムいます」と、いふ事であつた、私は、其婦人に會ふてみると、いかにも神經質らしいが、またどこか正直さうにみへる女である、「あなたは、地獄へ落ちることが、大へん心配になるといふことですが、本當ですか」、「ハイ夫と子供を先だてましてから、どうも二人が私をひつぱりに來るやうな心地が致しまして、地獄へ落ちることが、恐ろしくてならぬので……」、「成程、あなたは、よく釋迦如來の仰せを守るお方だ、佛說をそのまゝに信ずる人は賴もしい」と私がいふと、其意が解せぬ樣子であるから、重ねて私からたづねた、「あなたは、此世に生れてから、何時地獄を見たことがありますか」をいふと「一度も見たことはありませぬ」と答へる、「そんなら、落ちねばならぬ譯はどうして知りましたか」と聞いてみると、たゞだまつてをる、私は又重ねていふた、「見たこともないのなら、落ち

ねばならぬと云ふことも知らぬ筈であるのに、地獄といふものがあつて、そこへ落ちて行くものだと心配するのは、それは、知らず〳〵の間に、釋迦如來の因果の敎が信じられて、罪のまゝで往くと地獄へ墮つるといふことが耳へ入つたによつて、それをそのまゝにあなたの心にうけいれてをればこそ、そんなに心配がおこるのである、こんなに佛の仰せをまうけに信じてをる人ゆゑにたのもしいといふのです」といへば、すこし合點が出來たやうであるから「あなたは、佛の仰せを、こんなに信じてをるとは思はなかつたのに、知らず識らずに、仰せのまゝを、まうけにしてをつたものだ、といふことに合點が出來ましたか」と押して問へば「よく分りました、その通りでございました」と答へた、「それでは、佛の仰せを、もう一つ信じて下さい、當り前なら地獄行であるものを、如來の御本願があればこそ、南無阿彌陀佛の名號が、其落ちる心に染みついて淨土へ連れていつてやる、といふ仰せも、まうけにして安心してはどうです……落ちるといふ仰せはまう

けに信じて心配しながら、南無阿彌陀佛が淨土へ連れて往つて下さることが、まうけに信じられぬといふことはあるまい、落ちる方もまことに信じ、落ちるまゝをお六字一つに助けられることも誠に信じなさい」と云ひきかせると、其女の申すには「六字一つで、お淨土へまゐらせてやるといふ仰せを當にしてをつて、もしそれがはづれたら如何致しませう」といふ、「六字一つでお淨土參りがはづれたら、佛說がはづれるのである、佛說がはづれることなれば、地獄へ落ちると說いた佛說もはづれてしまふからね」といふてきかすと、又其女のいふには「落ちることは、我身ながら、よくわかつてをります、ねてもさめても罪惡ばかりをしてをりますから……」といふ、「そのねてもさめても罪惡ばかりであると、いふことまでが、やはり釋迦如來からの敎ではないか、身口意の三業そろへて惡ばかりをつくつてをると仰せられたのも、如來の言でないか」と云ふてをる間に、其婦人はよく督心して、「有り難うございました、もう不足は申されませぬ、あゝこんな奴めをお六字さまが、このまゝ御助け下さいますとは……」と、涙を流して喜び出したことがあります、親鸞聖人は敎行信證のうへに、「我が彌陀は名を以て物を攝す、是を以て、耳に聞き、口に誦せば、無邊の聖德識心に攬入し、永く佛種となり、頓に億劫の重罪を除き、無上菩提を證る」と仰せられました、攬入とは、南無阿彌陀佛が、われらのたましひに薰じつくといふことであります、私達は、たゞ〳〵この六字を信ずるばかりで救はれるのである。

名號が薰じついて

一〇、要するに、釋尊の「悟り」の內容である——宇宙の生命(彌陀の本願)——絕對眞如——(南無阿彌陀佛)この「自覺」が、等しく私達の自覺(信心)となるのである、卽ち南無阿彌陀佛のまことは、遠く私とはなれてましますのではない、釋尊の心の裡にましますやうに、また私の中心にもあらはれて下さるのである、一切の眞理も八萬四千の法門も、皆このうちに攝まつてをるのである、私達は、すべて、この力、この他力の惠みによつて生かされてゆくのであるから、之に任

せ、之に隨ひ、之を信ずるところに、絶對平安の救ひと、歡びを味はふのであります、こゝに於て釋尊と面々に相接し、心々共鳴する事を感じさせていたゞくのであります。

第十三講　一念喜愛心と不斷煩惱

能發一念喜愛心　　よく一念喜愛の心を發すれば、
不斷煩惱得涅槃　　煩惱を斷ぜずして涅槃を得。

一、前章に於て、釋尊出世の本懷を述べられたから、これより以下は、釋尊が信心を頂いた者の、色々の利益を明し給ひしことを讃仰せらるゝのであります、そして本節は、信心を得て、如來のお慈悲を喜ぶ心の發る身になつた者は、煩惱を斷たないで、現在は罪惡のこのまゝで、涅槃の位に入れていたゞき、未來は必ず大涅槃の證果を、ひらかせてもらふことを、示されたのであります。

二、私の子供は大へん犬を可愛がるくせがあります、以前ポスといふアメリカ種の小犬を飼ふてをりました、犬は毎朝子供が學校へ行く時は、二丁程隔たつた學校の門前迄送つてゆく、又歸る時がくると、チャンと路まで迎ひに出る、子供はポスを抱きかゝえて頰ずりして喜ぶ、犬は子供にとびついて尾をふる、ポスは子供の命令なれば大概よく聞きわける、犬は或る程度迄人間の言葉が解るやうであります、所が、いつどこで不品行をしてきたか、最もたちの惡い梅毒に感染して、お產をしてまもなく、からだ中の毛が拔け落ちて、眼から多量の涙を出し乍ら、遂に哀れに死んでいつた、其時子供も一しよに泣き出して、其日はとう〳〵晝飯も晩飯も喰はずに萎れてしまつたことがある。

三、人間の世界と畜生の世界とは大分境界がちがつてをります、その異つた世

界に於て、僅かばかりの言葉が通じ、そのこゝろがかよふと云ふことは、本當にうれしいこゝちがします、不思議と云はうか勿體ないと云はうか、たゞれいきつたこの汚らはしい人間の心の中に、いつ頃からか無漏清淨の如來のお慈悲が慕はしくなり、この苦しい悲しい現實の中に、南無阿彌陀佛の佛心が味はゝれ、いつ思ひ出してみても「我は如來と一しよにをる」といふことが、こんな心にかようてきたといふことは、なんといふ嬉しいことであらうか、聖人が、いま、「能發一念喜愛心、不斷煩惱得涅槃」と讀まれた思召しが、私の心の中にもはつきりと味はれます。

能發一念喜愛心

四、「一念喜愛の心」――一念とは、一つのおもひと書ます、ながい迷ひにとぢられてゐた人間のこゝろの中に、はつきりと「我は如來に助けられてゐるのだ」といふ一つのおもひが生れたことである、私達凡夫の心の中に「我はいつも佛と一しよにゐるのだ」といふかたい決心の出來たことをいふのである、滅びてしまふ我がいのちにいつまでも滅びぬ不思議ないのちが生れたことである、佛智と云はふか大愛といはふか、お淨土にましますみほとけが私の主觀の中でピタリと一つにとろけ合ふて下さつたこゝろを「一念」といふのである、仍て聖人は「一念といふは、信心をうる時の、きはまりを表す言なり」と仰せられました。

一念

五、こうした尊いこゝろは、どうしておこつてきたのであらうか、それは人間の心の中にあつたものが、今初めて現はれてきたのでもなく、また人間が一生懸命になつた努力や、或ひは聽聞の力から湧き出てきたものでもない、この一念の心を、私達にめざめさせんが爲に、如來の遣瀨なき「一念力」が我等の心の中に到り徹つて下されたからである、卽ち、如來の御念力が人間の心に展開してきて、今一念となつて顯はれてきたのである、言ひ換れば、如來の大御心が、私の心の中によみがへつて下されたのである、こゝを聖人が、「能く一念喜愛の心を發す」と申されたのである、この心を蓮如上人は、「信心」のことだと「正信偈大意」に

示されてあります。

能發

六、「能發」とは、よくおこるといふ意である、喜愛心が起るのである、どこへ發るか、我胸の中に發るのである、何と發る「如來と一しよだ、往生は一定だ」と發るのである、發したのは私であるが發させたのは彌陀の力である「鳴くはわれ、鳴かせたたねは向ふから」である、鶯は春に成れば分別なしに鳴き出します、

鶯が鳴く

鳴いたは鶯なれども、鳴かせたのは春の陽氣である、「信は願より生ずれ」とある如く信じたは私なれども、信じさせたは彌陀の願力からである、善導大師は「衆生貪瞋煩惱中、能生清淨願往生心」と叫ばれた、煩惱の濁の中へ、清淨の願心が、生れる筈はないが、彌陀のみこゝろが、入り込んで下されたからであります。

喜愛心

七、「喜愛心」――とは喜びはよろこびである、愛はうれしい滿足である、私達がさまの〳〵憂ひや惱みの心のうちに、尊い如來のみこゝろをおもふことは、卽ち如來の大愛に觸れることである、そこに大なる喜びと永遠の希望が味はゝれる、

この心を今喜愛心と仰せられたのであります、喜愛心――なんといふ温い言葉でせう、私達の周圍に、どれほどの悲しみや、苦しみが押しよせやうとも、我等はつねにこの一念の佛心に立ちかへつて、どことなく絶へず春風にあたゝめられるやうに、この喜愛心を以て、一歩々々お淨土に進んで往くのである、ゆゑに一念には必ず喜びが添ふのであります。

ほれかへす一念

八、加賀の、大西ます子といふ媼は、「ほれられて、いまほれかへす一念に、添ひとげませう阿彌陀ほとけに」と俗謠を作つて喜んだといふ。

筑後の蒲地といふ方は「阿彌陀如來の本願は、阿彌陀如來の愚痴である」といはれてをる、法味としてはなる程有り難い體驗である、他の諸佛菩薩は、いくら云ふて聞かせても、聞かぬ惡人は、到底助けることは出來ぬと、あきらめて、見切りをつけられたのに、阿彌陀如來だけは、その諦めがつかず、見切りがつけられないで、どうかして〳〵と、五劫の間、血の涙をしぼつて下さつた、大愛着心

があなたの本願力である、私達が、いつの頃からか、如來様を慕はるゝやうになつたのは、この如來の大愚痴、大愛着心に口説き落されたのであるといふてもよい、親鸞聖人が「信樂を開發することは、如來選擇の願心より發起せしめ給ふ也」と仰せられたのは、こゝの味はひを述べられたものである、「思ふた念力岩でも通す」といふ諺がある、能發一念喜愛心とは、阿彌陀如來の、助けずばをかぬ、救はずばおかぬの、「一念力」が、私のしぶとい胸に、徹つて下された味はひであります。

ライオンと園主

九、京都の岡崎公園内の動物園に、大きなライオンが居る、十年前に獨逸から買ひ受けて來たものだそうなが、もと、獨逸で子のやうに、このライオンを可愛がつてをつた園主が、日本へ賣つたライオンに頻りに遇ひたくてならぬやうになり、わざ〳〵獨逸から京都へたづねて來たそうである、もう十年の永い歳月がたつてゐるから、忘れてゐるだらうと思つて、獨逸の園主が、ライオンの檻の所へ往つて、檻の外から「オイ、おぼえてゐるかい」と聲をかけると、すぐにとびおきて、いかにもなつかしそうにしてゐるので、遂に檻の中へはいると、まるで久方振で我が子が親に遇ふた時のやうに、彼の怖ろしき猛獸が、恰も猫のやうに、獨逸の園主に頬ずりをして喜んだ、その情愛といふのは、涙ぐましいほど美しいものであつたそうである、獨逸の園主の、ライオンを可愛い、と思ふた一念が、猛獸の心に感應道交したのであらう、いま、逆謗の死骸同様な、強剛難化の淺ましい我心に、如來の御一念が、徹到して下された故に、佛とも法とも知らぬ、わけのわからぬ此の心に、大悲の親様をたのもしいといふ「一念喜愛心」が、おこつたのだと思へば、何といふ尊い情愛であらうか。

不斷煩惱得涅槃

一〇、次に「煩惱を斷ぜずして涅槃を得」――「煩惱」とは、心の煩悶、心の惱みであります、我々がこの世で、かく迄煩ふたり惱んでをることは、すべてこの迷ひの煩惱からおこつてをるのである、この煩惱さへなければ人間は苦しみも悲し

みも迷ひもない筈である、そこで、この人間の煩惱を斷ち切つて苦しみや迷ひのない境界、卽ち「悟り」を得やうとしたのが古來の修行者達の行き方でありました、所が、この煩惱は、人間が肉體をもつてをる限りどうしてみても逃れる事の出來ない業苦であつて、人間がこの煩惱を本當に斷ち切らうとするなれば、先づ人間をやめにしなければならぬ、人間として生きながらへ乍ら悟りを開かうとすることは夫れは無理なことである、依つて古來の修行者達は、ずゐぶん人間としては、無理な難行苦行を積まれたやうであるが、遂に失敗に了つてしまはれたのであります。

一一、然るに、ひとり我が聖人のみは、かゝる人間自體の煩惱を、いかなる努力や苦行をもつてしても、到底たち切ることは出來ないものであると斷言して、「不斷煩惱」の宗敎をうちたてられたのであります、則ち、私達の煩惱は、人間の力ではどうすることも出來ないのであるからこのまゝにしてをいて、この煩惱の心の中に「その煩惱のまゝを生かしてやらう」、「その煩惱のまゝを助けやう」とせらるゝ、如來本願の佛心の、いたりとゞいて下さることにめざめて、この煩惱にみちた心の中で「我と佛とが一しよに住んでをる」といふ、絶對他力の信心を獲得することによつて、本當に救はれることが出來るのであると仰せられたのであります、煩惱具足の私達は、この「不斷煩惱」の宗敎でなければ、とても救はれる道はないのであります。

一二、聖人獨特のこの「不斷煩惱得涅槃」の宗敎を、私達の現實の上に味はふと何とも云へない有難さを感ずるのである、いま自分の心を調べると、罪と惡との汚れはいつも心のうちに一ぱいである、煩惱の泥は相も變らず濁つてをる、けれども、その心の奥底には斷へず「眞實に生きたい」、「ほんとうに救はれ度い」といふ念願が燃えてをることは確である、我が心の奥の奥から、衷心念佛せねばをれぬ、やむにやまれぬ心の踊つてをることは否むことは出來ません、この心こ

そ私のうちに在つて、しかも私の心でない清い心、尊い心、能生清淨願往生心――から私の心を衝いて發して下さつてある心である、この佛心から私に如來を求むる心を發させて下さつた他力の御催促であつたかと思へば、何ともいへぬ嬉しさがこみ上げてくるのであります、極善最上の南無阿彌陀佛のみこゝろは、すでに私の汚れ切つたる煩惱の泥田の中にたねをおろして、いま、「こゝに如來が」とめざめた一念の時に、濁りに染まぬ白蓮のやうに、喜愛心となつて咲き匂ひたまふのである、なんといふ喜ばしいことであらうか。

一三、こゝに於て私は、もはや凡夫であつて凡夫ではない、佛の子にして頂いたのである、すでに聖者の列に入れられる身になつてをるのだ、菩薩と同じ位だと許されるのである、否菩薩どころではない、正に如來にひとしき「涅槃」にまでに引き上げて下さる身にして頂いたのである、本當に仕合せを喜ばずにはゐられません。

「涅槃」とは、「滅度」と譯して、如來の悟りのことである、我々は、久遠の昔より、迷ひの上に迷ひを重ね、苦より苦に入り、流轉に流轉をつゞけてきたが、今度といふこんどは、その苦しみの泉である煩惱の流れを如來とともに渡り切り、一切のくるしみを滅しつくした「滅度」――「涅槃」――大安圓滿の「大寂定」――「安養淨土」の妙境にいたるのである、「不斷煩惱得涅槃」――なんといふ大きな叫びであらう。

第十四講　歸入一味の宗教

凡聖逆謗齊廻入　凡聖逆謗ひとしく廻入すれば、
如衆水入海一味　衆水の海に入つて一味なるが如し。

一、「凡聖逆謗齊しく廻入すれば」とは、凡夫も聖者も反逆者も（父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、佛身を傷つけ、和合せる僧團を破る等の五逆罪を犯せる者）また如來を斥け、出家を罵り、正法を謗つたやからも、齊しく、今までの己れの誤りを懺悔して、この度の往生の一大事については、すこしもまに合はすべき力の無きことに慚ぢ入りて、如來の大慈悲のみこゝろに廻心すれば、凡夫聖者の區別なく、すべて南無阿彌陀佛の大願業力によつて、以前の惡業も、現在の煩惱も、何等の障りにもならずして、一人も漏れなく、同一平等に救はれてゆくのであることを示されたのがこの一節であります。

二、釋尊が、成道遊ばされてから、二十年目の夏の事である、印度のコーサラ王の國師の子に、鴦崛摩といへる人があつた、容貌が立派で、才智があつて、その上力まで人に勝れて居た、大きくなつて波羅門の弟子となり天晴、門下中の頭目となつた、であるから外の弟子達がそれを嫉んで、どうかして陷れる工夫がないものかと思つて居た矢先のことである。

波羅門の師匠の妻は、どの點から見ても勝れて、將來は法をつぐに定まつた鴦崛摩を、心密に憎くないと思つて居たと見へて、ある日夫の留守を幸に、彼女の積る思ひを打ち明けたことである、眞面目な鴦崛摩は聞いて驚いて「そんな非道なこと」と反對に責め敎へた所が、女は「飢て食を求め乾いて水を求めるのが、どうして罪であらう」と、色欲に眼が眩んで燃えるやうに彼の手に縋り付くのであつた、彼はどこまでも女を散々に恥ぢさせて、其場をはづしてしまつた、かうなれば女は恐ろしい强いものであつて何處の國でも人情に變りはない、可愛さあまつて憎さが百倍した女は、夫の歸宅するを待つて、僞つて衣を裂き髪を亂し、鴦崛摩に犯されて悔しいのですと泣いて訴へた、夫はそれを聞くと忽ち怒つて一夜中復讐の方法を考へたのであつた。

翌朝、師匠は彼を一室に呼んで「卿はもう學ぶことがない、この上は法を嗣ぐ

ばかりである、それには非常な方法に依らなくてはならぬ、今から直に出掛て、百人の命を取つてその指をつないで首飾りにせよ、さうすると眞の道が備はるのである、この一振の劍をあたへるから、すぐに〳〵」と云ひ放たれて、彼は夢のやうに一時は驚いた、けれども、何の道でも一方に深入りする時は、いつでも常軌を逸したことをするものである、宗教上のことは尙更である、一時驚いた彼は、さうです百人の命よりも法の命が更にもつと尊いのだと云つて、鴦崛摩はこの破天荒の仕事が自分に取つて、きつと偉大な證りを持ち來すに相違あるまいと思はれてならぬ、愈〳〵この慘虐な百人斬といふ師命を敢てする事になつたのである。

三、彼は人通りの烈しい四辻に立つて往來の人々を斬り殺したのである、新しい血を見る度に、人間の野性が猛り立つて眼は血走り、髪は逆立つて行く、流れる血を袖に拭つて突立つて居る有樣はまるで惡鬼そのまゝの形相であつた、逃げた人々は慄へ叫んで、彼方此方へ散つて行く、泣く者、罵る者、悲鳴を上げるものが巷を行き合ひ、中には警察へ馳け込んで取り押へ方を訴へるものもあつた、舍衞の街は恐ろしい騒ぎである。

彼が紅したたる指の首飾りをして、殺すべき往來の人を待つて居る、その夜叉のやうな羅刹のやうな血みどろの姿を指鬘と呼んだのである。

四、この時、行乞に出て居た佛弟子方は、三人五人と祇園精舍へ歸つてこの由を釋尊に話した。すると釋尊は「愍れなものである、いまから行つて救つてやらう」と云つて、直ぐ寺を出て行かれた、途で牧草人に逢ふと、

「出家よ、こゝを行つては危險だ、人殺しが居る」といふのを聞いて「世界をあげて敵對しても恐れる心はない、それに一人の鬼が何ほどのことがあらう」と救ひの光りを先に立てゝ靜かにお出でになつた。

鴦崛摩の母は中食を持つて家を出たが、途で人殺しの噂を聞いて、どうやら我子の樣であると、肝をつぶし氣狂のやうになつて、其場に行つて見た、我子は滿

身紅に染んで、生血がぽと〳〵落ちる指をつないで首にかけ、焔のやうな息をついて、刀を杖にして四方を睨んで居るのである、母は夢とばかりに驚いて我子の側へ近づくと、鴦崛摩は朝から人を殺したがまだ百人にならない、誰か通つてくれゝばと思つて居た矢先、母の姿が見へたので喜んで「これで百人だ」と急ぎ刀を取りなほす處へ、救ひの光り釋尊は悠然とした姿でこの場へ來られたのである。

五、 鴦崛摩はその姿を見ると、母を捨てゝ釋尊に斬りかゝつた、所が、不思議や釋尊の威德にうたれたのか、走りかゝつて見てもどうしても近寄ることが出來ない、手足慄へて力も竭きる、思はずよろ〳〵と倒れるやうである、彼は叫んだ、「出家、且く止れ」、釋尊は靜かに、「私は最初から此處にじつとして居る、汝こそ獨りで立ち廻つて居るではないか」、「どうも不思議だ」と彼はうめいた、釋尊は更にいはれた、「汝は癡想のために、みだりに人の命を傷つけて居る、私は限りない智慧をもつて居るから巷に居ても心靜かである、一切の人々を愍んで居る、私は汝を救はんが爲に此處に來たのである」と。

この御聲は冷水をあびせかけられたやうに鴦崛摩の胸に迫つた、彼は惡夢から醒たやうに我にかへつて、劍をすてゝ釋尊の足下に平伏してしまつた、こゝに於て魂に目が開き、心から釋尊に歸依する思ひに成つたのである、かうして釋尊の後に伴いて祇園の寺へ入つたのである、祇園の寺の奥は深いゆかしい所であつた、鴦崛摩は世尊の一座の敎への下に迷ひを斷つて悟つたのである、卽ち鴦崛摩は釋尊の中心に廻入したのである、翌日になると、昨日九十九人の命を絕つた彼に、「生れてから殺生をしたことはない」といふことが出來た、生れてからといふのは悟りを開いてからと云ふことである、逮捕に來た警察官に對して釋尊は「もうその賊はこゝに出家して居る」と云はれたのを聞いて、コーサラ國王は、どんな殘忍なものをも慈愛に包んで、劍も杖もつかはないで、迷を除き、惡逆の心を降伏して下さる、どうかこの上國中の人達の思想を導いて、佛に親しむやうにして

頂きたいものだと仰がずに居られなくなつた、そして鶩崛摩を出家として禮を取り、王は一生涯供養をしますと誓はれた事である。

六、その後、彼は惱んで居る世の人を救ひ歩いたが、人々は彼を見ると、先の非道の百人斬が來たと云つて、食物を呉れるものもない、口々に罵つて瓦や石を投げつける、杖をもつて打ちつける、さきに他人を殺して血に染んだ彼は今は他人から打たれて滿身紅に染まつた、しかも痛みを覺へず苦しみも無く寂かに眠つて死の時を待つて居た。

佛弟子達は彼の餘りに急な變り方を驚いたといふことである。

七、世に、沈痛なる懺悔ほど尊いものはない、大集經には「百年の垢衣も、一日に瀚いて、鮮淨ならしむるが如く、千年の闇も一たび懺悔の日光の照す時は、消えるが如し」と、說かれてありますよつて、過去の罪は、懺悔の一念に消えて、身心共に、善人となることが出來るのである。

懺悔は尊い

天親の懺悔

八、わが親鸞聖人が、印度、支那、日本の三國に於て、最も崇め給ひし七高僧の第二祖、天親菩薩は、もとは深く小乘敎に歸依して、わが大乘佛敎を種々に批難し攻擊し、而も、大象の上に、自作の倶舍論の偈頌を大書したる板を掲げて、懸賞で、大乘敎徒の敵手を求めて歩かれた程、大乘の敎を誹謗せられて、小乘敎を勸めてあるかれた方である、然るに、兄の無着菩薩の一夜の忠告により、大乘妙典の『華嚴經』を繙かれるなり、その意義の深さに感じ入り、今まで、かういふ深刻なる妙法を知らずして、誹つてをつたことが、非常に愧かしく思はれ出し、悔恨のあまり、舌を嚙み切つて自殺して罪を謝せんとまでせられたのである、それを兄上の無着に見つけられて、「それが、所謂、小乘根性といふものである、大乘は、煩惱卽菩提、生死卽涅槃、卽ち不斷煩惱得涅槃の宗敎ではないか、小乘を勸めし其舌で、今より大乘を說き弘めよ」と、諭されて、いよ〳〵前非を悔ひて、大乘の研究を深め、後に五百部の大乘に關する書物を書き、殊に『淨土論』

を著して、大に阿彌陀如來の教法を弘められたのであります。

耳四郎、辨圓

九、近くは、法然上人の御持物を奪はんとしたる耳四郎、わが親鸞聖人を殺害せんと企てたる辨圓、かゝる凡、聖、逆、謗の孰れもが、こゝろから、自己の罪惡を懺悔し、心をひるがへして、如來のみこゝろに歸入すれば、みんな一味に救はれてゆくのである。

廻入

「廻入」とは、今まで犯してきた、罪業を懺悔して、如來のみこゝろに入ることである、聖人は和讃に「彌陀智願の廣海に、凡夫善惡の心水も、歸入しぬればすなはちに、大悲心とぞ轉ずなる」と、喜ばれてゐられます。

聖人の懺悔生活

一〇、親鸞聖人の宗教は、一面より窺へば、感謝の宗教であり、また一面より窺へば懺悔の宗教であります、聖人程、現實の自己を抱いて深刻に泣いた人はまたとあるまい、「定水を凝らすと雖も、識浪頻りに動き、心月を觀ずと雖も、妄雲猶覆ふ」、と愧ぢ入り、「悲しき哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈沒し、名利の大山に迷

聖人の自重的態度

惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近づくことを快しまず、恥づべし、傷むべし」と、懺悔し、また、「淨土眞宗に歸すれども、眞實の心はありがたし、虛假不實のわが身にて、清淨の心もさらになし」と、嘆き、自ら「愚禿」と、名のつて、すべての民衆に、御同朋、御同行とかしづかれ、また最後には「それがし閉眼せば、屍を鴨川の底に沈むべし」と、仰せられて往生せられた、聖人の御生涯は、實に懺悔と謙虛そのものであつた、殊に、奈落のどん底へ落ち込まねばならぬたましひそのものを凝視められては「何れの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」の歎異鈔の、御言にいたりては、實に悲痛なる慚愧の極みであります。

一一、聖人の信念は、この徹底せる懺悔の上に築かれたる金剛心である、「慶しき哉、心を弘誓の佛地に樹て、情を難思の法海に流す」、「爰に愚禿釋の親鸞、慶しき哉、西蕃月氏の聖典、東夏、日域の師釋に遇ひ難くして、今遇ふことを

得たり、聞き難くして已に聞くことを得たり」(教行信證)、なんといふ喜ばしき讃嘆であらうか、「念佛者は、無碍の一道なり、そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪悪も、業報も、感ずることあたはず」(歎異鈔)、「信心喜ぶ其人を、如來と等しと說きたまふ、大信心は佛性なり、佛性卽ち如來なり」、「眞心徹到する人は、金剛心なりければ、三品の懺悔する人と、等しと宗師はのべたまふ」、「五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてゝ、自然の淨土にいたるなれ」(和讃)、「凡聖逆謗齊廻入、如衆水入海一味」(本偈)、何と云ふ雄々しい叫びであらうか。

一二、地獄必定の大罪人が、一念、南無阿彌陀佛を信ずるたち所に、如來と等しき正定聚の位に入り、この淺ましき煩惱濁穢のこのなりで、妙好人、希有人、最勝人、染香人、芬陀利華、と讃嘆をうける身となるのである、喜ばしき哉、慶しき哉、然し、この身になつた、その背後には、法藏菩薩の我爲に流し給へる血潮の御苦勞のあることを忘れてはならぬ故に、聖人の宗教は一面は如來に等しと迄味へば大に自重せねばならぬ宗教であり、また一面我身を省みれば實に頭の上らぬ懺悔の宗教であります、我等の宗教的生活の基調も、またこゝに置かねばならぬのである。

第十五講　自他平等の救ひ

如衆水入海一味

一、次に「衆水の海に入つて一味なるが如し」とは、川にはいろ〳〵あつて、大きな川もある、又濁つた川もある、澄んだ川もあつて、千差萬別に異なつてをるが、これらのすべてが一たび海に入れば、同じ一つの潮の味にかはる如く、如來の大愛に歸入すれば、凡聖逆謗ひとしく平等に救はれるのであると述べられたのであります。

二、「衆水」とは、衆生の機相が色々に異つてあることを川の水に喩へられたのである、多くの人間の中には、善人もあれば悪人もある、貴い者もあれば賤しいものもある、賢き人愚なる人、老たる人若き人、貧しきもの弱きもの、風采の高い人低い人、能力のある人ない人、地位の尊い人卑しい人、その差別は實に千萬無量である、而して人間がその差別に囚はれてをる間は、いつも自分を本として他人をみますから、その相手に向つて、美望とか、輕蔑とか、侮辱とか、嫉妬とか、褒貶とか、批評とかの思ひに迷ふのである、そこに其人と自分との間に一つの城壁をかまへて、双方が反目したり憎み合ふたりして、遂には面白からぬ思ひを抱かねばならぬことになるのであります、そこで、これらの差別に亂されず妄執の城壁をうち破つて、自他平等の心をもつて、彼の心は我が心、我が心は彼れの心と、互に圓らかに融け合ふて、春水の如く流れ合ふてゆくことが出來たなれば、どんなに妙趣と清興とを感ずることであらう、それはたゞ各自めい〳〵が、同一の阿彌陀如來に救はれ、同一の南無阿彌陀佛を味はひ、また同一の信心の廻向されてをることを自得して、みんな自分と同じやうに、一つの親に愛されてゐるのだ、一つ親の膝下に於ける兄弟である、といふ一念に立ちかへることによつてのみ、眞實の自他平等の妙趣が感ぜられるのであると祖聖は仰せられるのであります。

自他平等の救ひ

三、然し、此尊い道理は、本當に他力信心を味はふてをる人でなければ了解はできぬことであらう、自力我慢の人は、兎角自分を本として他をみるから、智惠各別なる故信心も亦各別なりと心得て、中々に一味平等の味はひは分らないのである、七百年前に、親鸞聖人が吉水に於て、勢觀房、念佛房達と、信心諍論をせられたのもこれであつた、然るに師の法然上人は「信心のかはると申すは自力の信にとつての事なり、即ち智惠各別なるが故に信また各別なり、他力の信心は善惡の凡夫ともに佛のかたよりたまはる信心なれば源空が信心も善信房(親鸞)の信

信心諍論

心も更にかはるべからず、たゞ一つなり」と仰せられて、師の法然上人も親鸞聖人も共に同じ他力の大道を歩まれたのでありました。

四、「一味」とは、同じ一つの南無阿彌陀佛の信心を惠まれた者は、どんな者でもみな同じねうちであることを現はされたお言葉であります、卽ち、世の色々の差別の上に同じ尊い價値が認められてゆくのである、たとひ王侯でも乞食でも、貴族でも平民でも、主人でも召使ひでも、地主でも小作でも、資本家でも勞働者でも、信仰の上からはみんな同じ如來の子であります、恰も天上の月は、清水と濁り水との隔てなく、すべての水面にその影を宿すやうに、彌陀の大悲は如何なる人々の胸のうちでも、尊い南無阿彌陀佛の信心を宿して下さるのであります、こゝに於て上なる者も下なる者も貧しきも富めるも、賢きも愚なるも、すこしの嫉妬もなく軋轢もなく各〳〵平和の生活を進むことが出來るのであります。

五、これは、藤原正圓氏の話である、福井縣の今立郡の片田舍に、市右衞門といふ老爺がをる、この老爺の住む村は、極めて小さな村であつた、市右衞門は其村で一番貧乏な小作人である、その平和な村に、初めて小作爭議らしい爭ひが起つたのである、勿論、小作人の全體の意思が動いた譯でもないが、或る團體に煽てられて、つひに「やれ、やれ」位な調子で起つたことらしい、「地主へおさめる年貢米は三割減す事、もし承知されねば、絶對に納めぬ事」と、まで申合はせたのである、然し、其年の收穫は、實は、平年作からは、二割も多かつたとのうわさである。

村で小作の一番末席である、市右衞門などには、相談をかけなくてもよからうといふ者もあつた位、數の外であつた彼にも、矢張、一人でも小作人が洩れてゐては、小作人全體の意見と言ひたてることができぬので、最後に十餘名の小作代表委員といつた形の人たちが、連名帳に、記名捺印されたのをば、彼の前にさしつけたのである、市右衞門の無筆を知つてゐる彼等は、彼の姓名だけを、自分等

の筆で書いておいてさし出したのであつた。

市右衞門の家の入口に立つた委員は、彼に向つて、「サア、もう終だ、お前も聞いてをる通りの、例の一件だ、印を一つたのむ」とあつさり片づける心算でいつた處、市右衞門は、暫らく、モジ〳〵してゐたが、そのうちに、思ひもよらぬ事をいひだしたのである。

「俺の田は、今年は平年作以上にたくさんあつたのだから、俺は定めた年貢だけは納めさしてもらふつもりだ」と、云ひ放つた、そこで委員一同は、喧しく嚇しつけた。

「失禮だが、お前は村一番の貧乏人ではないか、オイ、三割儲かるのだぜ、貧乏人の癖に、慾の無い事をいふぢやないか、オイ小作人の交際だ、理窟抜きにして、早く印を捺すのだよ」、「さうだ〳〵、交際だ、交際ぢやないか」と一同はいふ、そのとき、市右衞門は泣いてゐたそうであるが、暫らくたつてから靜かに云ひ出

南無阿彌陀佛の本尊

した。

「尤だ、尤には違ひないが、正直の處、俺のやうな慾の深い男は、三割どころか、無年貢にでもして貰ひたいのが腹一ぱいだ、然しな、俺の胸には、「なむ、あみだぶつ」の御本尊さまがお宿りだから、俺の自由にはならぬのでナア、御本尊様は、『そんな事は道ではない』と、仰やるからナア……」

「俺みたいな非人間が、お前達に出過ぎた事をいふやうだが、俺は村の衆に見捨てられても、如來様からは離れたくはないのだ、俺は、如來様なしでは、到底一日も生きてゐられない程な業ざらしだ、どうか堪忍してくれ」と、兩手を合せ、

「人間でないと思つて、仲間から俺だけを除けてくれ、たのむ、たのむ」と、落ちる涙をば、荒れはてた掌の甲でふきながら、彼は兩手をついて賴むのであつた、沈默が暫らくつゞいた、委員は何とかいはねばならぬ羽目になつたので、「こんな事を云ひだしては困つたナア」と獨語のやうに云つてをる、そのうち、誰

かゞ、小聲で「なむあみだぶつ、なむあみだぶ」と、稱へ出した者がある、そのうちの一人が、こつそりと拔けて、家に歸りかけた、委員の一人は「オイ歸つたら話が、駄目になるぢやないか」と大聲で、その歸つて行く男をば背後から呼びながら、呼んだ男も呼ばれた男について往つて、其まゝ、家へ歸つてしまつた、殘りの委員も、またコソ〳〵と歸つてしまふたそうであります。

六、其後、市右衞門の、胸の御本尊の光りは、村人の胸の闇を晴らさずにはおかなかつた、そして、其處には、地主とか小作とかいふ階級的な境が全く除かれて、村人一切が、いつのまにか、唯一つの佛の御命にとけこんできた、一ヶ月もたゝぬ間に、大きな區長の宅で、御法座が開かれた、村人の全體が高座をとりまいた中に、市右衞門も、いつものとほりの姿をみせてゐたさうである、なんといふうるはしい光景であらうか、また讃岐の與北の正覺寺の門徒の川田政吉氏も、例の香川縣の農民組合の爭議で一度刑務所に入つた人であるが、ひと度如來の大

悲に目ざめては直ちに、道ならぬ事を懺悔して、今は縣から囑托されて、思想善導の講話にさへ巡廻してをる、私の尊い信の友である、阿彌陀如來を、我が心の本尊として、迎へまつつた生活には、魔界外道も近よることができぬ、同時に、すべてが、平和で、平等で、階級問題や、爭議の起りやうがなくなつてしまふのである。

七、祖聖當時の教團には、眞佛房、顯智房、唯圓房等の錚々たる方々を初め、其他澤山の御弟子がゐられたやうであるが、聖人は是等の人達を、決して弟子とは思はれなかつたのである「親鸞は弟子一人も持たず候」と仰せられて、同じ念佛する人々に對しては常に「御同朋、御同行」としてかしづかれたのであります、御同朋御同行とは本當にうるはしい名ではありませんか、この御同朋のうちには、智惠第一の法然上人も、盜人の耳四郎も、わが親鸞聖人も、聖人を殺害せんとした辨圓も、貪婪飽くなきこの竟恩も、同じ仲間にいれられて、如來の大悲

に救はれてゆくのである。

第十六講　如來の照護

攝取心光常照護
已能雖破無明闇
貪愛瞋憎之雲霧
常覆眞實信心天
譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇

攝取の心光常に照護したまふ、
已に能く無明の闇の破すと雖も、
貪愛瞋憎の雲霧、
常に眞實信心の天を覆へり。
譬へば日光の雲霧に覆はるれども、
雲霧の下明にして闇なきが如し。

一、阿彌陀如來の光明は、遍く十方世界を照して、一切の群生は一人として漏れることなく、斷へず私達の汚れきつたる、闇の心を照し、愚なる心を養ひ、迷へる心を導き、かよわい心を護りたまふのであるが、私達は、ながい間、それを氣付かずに、勝手に迷ひ、勝手に疑ひ、勝手にはからひ、勝手に苦しんできたのであつた、然るに、如來の光明は常に倦むことなく、強い力を顯はして、如來の救ひの喚聲である、南無阿彌陀佛を聞かしめて遂に、私達の無明疑惑の闇を打ち破りて、いまは、ほがらかなる信心を起さしめられたのである、然るに如來の方では、まだ〳〵光明の手をゆるめ給はず、より一層、私達の信心を、あなたの心光を以て、育て護り給ふのであります。

攝取心光常照護

二、「攝取の心光」とは、阿彌陀如來の御身より放ちたまふ「色光」に對して、いまは如來の御心から放ち給ふ智慧と慈悲の御光を、「攝取の心光」と、仰せられたのであります、釋尊は『觀無量壽經』に、「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」と申されました、卽ち、如來の光明は十方世界に照しづめではあるが、

之を氣付かぬ間を「遍照の光明」と名づけ、其光明のお育てを蒙つてをることを氣付き、如來のやるせなき大御心に觸れた時かち、「攝取の光明」に護られる身となるのであります、いまこの光明を、本偈に「攝取の心光」と申されたので、たゞ信心の行者、卽ち念佛の衆生のみが蒙る御利益であります、と云つて光明の體が二つあるといふ譯ではないが、私達が信心を獲る迄の間の御力きと、信心を獲た後の御力との上で、「遍照」と「攝取」との二つに分けて示されたのであります、ゆゑに、存覺上人は、

遍照と攝取

「心光といふは、これ光に、身相心想を分つて、其の體各別なるにあらず、たゞ義門について、宜しく其の意を得べし」

と、述べられてあります、つまり、私一人を救ふ爲の、佛心の御用について信前信後の二つに分けて、光明の名を「遍照と攝取」と仰せられたのであります。

三、淚の軍隊教育

或る年の秋、明日は滿期除隊になるといふ前日に、或軍隊の中隊長は、一人の兵士を、特に中隊長室に呼んで、突然、「氣をつけ――」と、號令をかけて、其正しい姿整をした兵士の、背後をぐるりと廻つておいて「休め――」と、號令して、中隊長は椅子にもたれて、目に淚して其兵士に語つた。

「汝は、三年間、克く勉强してくれて俺は滿足する」、「別れに望んで一言するが、實は汝が入營して來た時、みんなと一しよに整列させてみると、汝の頸が左に曲つてゐる、俺は困つた、一そう歸してやらうかと思つたが、折角、體格檢査に合格して、夏以來國家の干城として、陛下に御奉公申上げんと思ふて來たものを、片輪にして歸すのは可哀想でならぬ、又、親兄弟も、その覺悟をして、村人にも送られて來たものをと思ふと、俺はどうしても汝を歸へす氣になれぬ、そこで、その日より中隊附の將校から、下士に云ひ含めて、汝が每晩寢る時に、左の方の戰友に話かけさせるやうにして、汝を左枕に寢させ、中少尉を初め、自分も週番に當つた時は、いつも提灯を汝の顏にさしつけて、何べん見てやつたか知れない

ぞ、然し、いよ〳〵その甲斐があつて、汝の片輪はいつの間にか治つて、「俺は滿足する、俺は喜ぶ」、愈〳〵吾が家に歸つたら、兩親に孝行をして、渡世に勉强をして、三年間受けた軍事教育を忘れぬやうにしてくれ」と、涙にむせんで話し出すと、直立してディッと聞いて居つた、血氣盛んな兵士は、たまらずして板の間に打ち伏して、オイ〳〵聲をあげて泣き出した、「かくまでも、御親切な中隊長殿とは、知りませなんだ」、「この御恩を、この御恩」と、いつて、たゞ泣くばかりであつた、と、これは、故佐藤巖英さんから聞いた話である。

四、この兵士の心の裡には、此の中隊長の爲なれば、命を取られても不足はないといふ感恩に燃えたに違ひない、三年間、知らぬ間の中隊長の心づくしこそ、照育の光、即ち遍照の光明の味ひである、その手篤い教育の功があらはれて、いまは立派なすがたになり、かくまでも、御親切の御方であつたか、と氣付いた時が、信心を獲た時である、即ち攝取の心光に觸れた時である、しかし如來の光明は三年間位ではない、私達の知らぬ十劫正覺の曉より、一度は一度はの御念力の御育てゞあつた、この光明によりてわれらの信心を發させ、而して、このまゝ滿期ではない、これよりは猶更に心光攝護をして、私を佛にする迄は、お目ばなしがないのであります。

五、親鸞聖人は「金剛堅固の信心のさだまるときをまちえてぞ、彌陀の心光攝護して、ながく生死をへだてける」、「十方微塵世界の念佛の衆生をみそなはし、攝取して捨てざれば、阿彌陀となづけたてまつる」と、喜ばれました。

六、「攝取」とは、おさめとるといふことである、即ち、如來の智慧と慈悲の御心のうちに、攝めとつて捨てぬといふことである、蓮如上人は「逃ぐる者を、つかまへて、はなし給はぬことである」と、仰せられました、如來の積極的愛の抱擁のすがたであります。

七、「常照護」とは、晝夜不斷いつもかも護りづめといふことである、私達が、